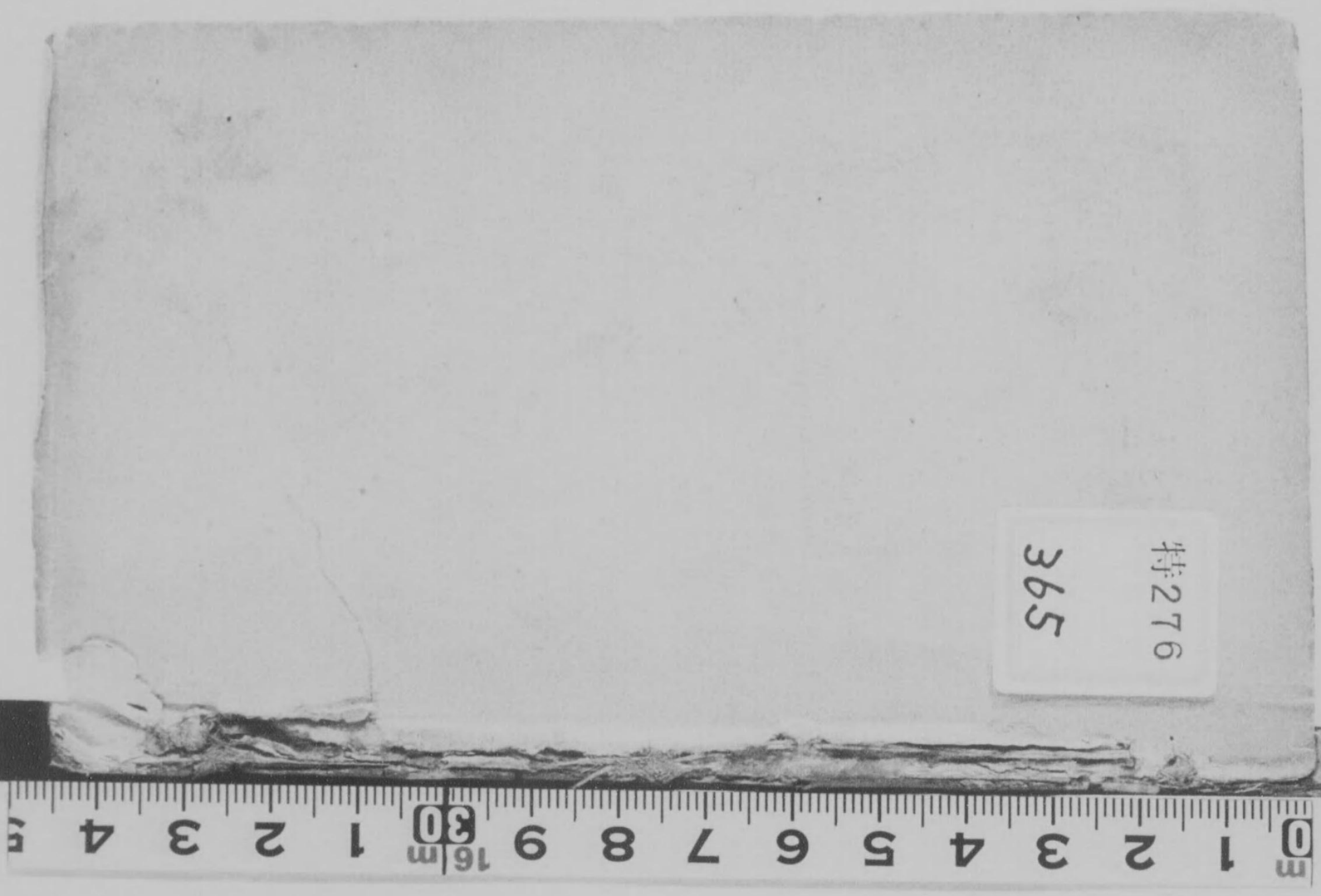


特276
365

特276
365
35-280

了解

表 3

3編

中等教育研究所編

東洋史

全

東京 光世館發行

大正
5. 11. 15
内交

緒言

本書の

- **目的**…中學校、師範學校、實業學校、女學校生徒諸君の豫習、復習用とし、かれて官立諸學校入學受驗者及び小學校教員檢定受驗者の參考書として編纂したるものなり。
- **内容**…現今弘く行はるゝ東洋史教科書中の教材は勿論、斬新にして趣味多き事項は概ね之を網羅せり。
- **形式**…理解と記憶とに便し、且つ試驗答案の模範を示さんがため、系統的に分類し要點を指摘して詳密に表解し以て學修の能率增進に努めたり。
- **利便**…閲讀に便せんがため、一題目の表解は必ず同一面に收めて彼此の關係を一目瞭然たらしめ、以て智識の整頓に資せり。
- **問題**…各章の終りには官立諸學校入學試驗問題其他重要問題を掲げ既習事項の復習に供し併せて試驗に出さうな問題の種類傾向を知るに便あり。

故に本書によりて學修するものは僅少の勞を以て比較的短時間に甚大の効果を收め得べく、諸君は本書を活用し能率增進の理に基づき優良なる成績を擧げんことを切望す。

大正五年十月

編者識

目次

第一篇　上古史……一

第一章　上代の支那……一

一　東洋の諸人種

二　三皇五帝の稱

三　堯舜の治

四　夏の代

五　支那の國體

六　殷の代

七　周の代

第二章　春秋戰國……六

一　春秋時代

二　戰國時代

第三章　周代の制度及文物……一〇

一　制度

二　世態

三　學術

第四章　秦の統一……一四

一　始皇帝の事業

二　秦の衰運

第五章　漢の初世……一七

一　漢楚の爭

二　高祖の事業

三　文帝の治

四　吳楚七國の亂

第六章　武帝の業……二〇

一　武帝の外征
二　武帝の内治
第七章　前漢の衰運……二四
一　宣帝の治
二　王莽の簒立
第八章　後漢の興起……二六
一　漢の再興
二　光武の施政
第九章　佛教の弘通……二八
一　佛教の起源
二　佛教の興隆
第十章　後漢の盛世……三二
一　東西の交通
第十一章　後漢の衰運……三四
一　衰亡の原因
二　群雄の割據
第十二章　三國及西晉……三八
一　三國攻爭
二　西晉の盛衰
第十三章　五胡十六國……三八
一　晉の南渡
二　五胡十六國表
第十四章　南北朝……四〇
一　南北朝の對立
二　佛教の流行
問題……四二

第二篇　中古史……四四
第一章　隋の興亡と唐の創業……四四
一　隋の興亡
二　唐の創業
第二章　唐の制度……四八
一　制度
第三章　唐代に於ける外國……五〇
一　外國經略
第四章　唐代の東西交通……五二
一　大食人の來航
二　諸宗教の東傳
三　文化の發達
第五章　唐の中世……五四
一　武韋の亂
二　玄宗の政治
三　安史の亂
第六章　唐の衰亡……五六
第七章　五代及宋の初世……五八
一　五代
二　宋の一統
三　宋の外難
四　仁宗の治
第八章　神宗の改革……六二
第九章　金の興起、宋金の交渉……六四
一　金の興起
二　宋金の交渉

第十章　宋代の文物……六六
問題……六八
第三篇　近古史……七〇
第一章　蒙古の興起……七〇
一　成吉思汗
第二章　太宗及憲宗……七三
一　太宗の業
二　憲宗の業
第三章　元の一統……七四
一　一統の業
二　宋末の誇
三　世祖の外征
第四章　元代の東西交通……七八
一　蒙古極盛時代の範圍
二　東西交通
第五章　元の衰運……八〇
第六章　明の初世……八二
一　太祖の業
二　成祖の業
第七章　帖木兒大王……八四
第八章　明の衰亡……八六
第九章　歐人の東航……八八
第十章　元明の文化……九〇
一　元代の文藝
二　明代の文化
問題……九二

第四篇　近世史……九四
第一章　清の興起……九四
一　清の開國
二　世祖の業
第二章　聖祖及高宗……九六
一　聖祖の業
二　世宗の業
三　高宗の業
第三章　清の制度學術……一〇〇
一　制度
二　學術
第四章　莫臥兒帝國の盛衰……一〇四
第五章　英國の印度經略……一〇六
第六章　阿片戰役、長髮賊の亂……一〇八
一　阿片戰役
二　長髮賊の亂
三　英佛の侵入
第七章　露國の東方經略……一一四
第八章　佛國の印度支那經略……一一六
第九章　朝鮮に於ける日清の關係……一一八
一　朝鮮
二　日清戰役
第十章　清國に對する諸強國の壓迫……一二二
一　列强の東方經略

二　清國の疲弊
第十一章　日露戰役……一二四
第十二章　日露戰役後の東亞の情勢……一二六
第十三章　清朝の滅亡、中華民國……一二八
一　清の滅亡
二　中華民國
問題……一三〇

目次終

東洋史

第一篇　上古史

第一章　上代の支那

漢族　支那人の大部分を占め東洋史上最も著はる。

東洋の諸人種

亞細亞人種

西藏族　氏、羌、月氏、吐蕃、今の西藏人、ネパール人
印度支那族　苗、越、印度支那人
蒙古族　鮮卑、契丹、蒙古人
通古斯族　肅愼、女眞、靺鞨、滿洲人
土耳其族　匈奴、柔然、突厥、點戛斯、トルコ人、キルギス人
日韓族　日本人、朝鮮人

歐羅巴人種

インドイラン族……

二 三皇五帝の稱

今より五千年前に漢族は黄河沿岸に蕃殖し、自ら中夏又は華夏と稱し多くの部落に分れて萬國と謂ひ、各々君長ありて其中より戴かれて天子となるものあり。これら天子の中に三皇（燧人氏伏羲氏神農氏）五帝（黄帝、顓頊（センギョク）、帝嚳（カク）、帝堯、帝舜）など云へる聖王ありて種々の製作を成せりとの傳說あれど支那最古の記錄なる尙書は堯舜以後の事を記せり。故に支那の歷史は堯舜に始まる。

三 堯舜の治

帝堯

帝嚳の子なり。萬國に戴かれて天子となり仁德を以て天下を始め平陽に都す。羲和に命じて曆法を定めしむ。

帝舜

老年に及び舜を擧げて政を攝せしめ次いで帝位を舜に讓れり。

仁德

頑父、嚚母、傲弟に對し、よく孝悌の道を盡し、賢德を以て聞ゆ。攝政となるや禹をして治水の大任に當らしめ、稷（ショク）契（セツ）、皐陶（カウエウ）等の賢臣を用ゐて天下よく治まる。位を禹に讓る。

政蹟

內治 治水の業を完へ、官制を定め、刑律をつくり、巡狩、朝覲の制を設けて諸侯を統制す。

外交 三苗を討ちて帝威を示し、領土を擴張す。

四 夏の代

創立

禹王の業

九年に亙れる大洪水を治め賢明にして仁慈なり。帝舜の禪を受けて即位し安邑に都し國號を夏と稱す。夏后氏と謂ふは中夏の君の義なり。

王位世襲

禹、崩じその子啓賢なり。衆に推されて王位を繼ぎ王位世襲の基を開く。

衰運

桀王

十七世四百餘年にして桀に至り淫虐なり。酒池肉林の樂に耽り政を忘り人心を失ふ。商王湯兵を擧げて桀を破りこれを南巢に放つ。

五 支那の國體……民主主義

堯舜禪讓の政を以て天下泰平を致せり。然るにこの後ち不德の君出づれば賢德の人これを討ち滅し代つて天子となる之を放伐と謂ふ。革命即ちこれなり。人民も不德を去つて有德に就く。所謂「撫レ我則后虐レ我則讐」の觀念は實に支那人の法的信念なり。我が「不肖なりとて賢德に讓りし堯舜時代を政治上の理想時代となす、亦宜なるかな。

六　殷の代

- **商の興起**
  - 湯王は帝舜の名臣契（セツ）の後なり。亳（ハク）（河南省歸德府）に興り賢人伊尹を舉げて政を委ね、善政を布きて四近を服し、遂に桀王を滅して帝位に上り亳に都し國號を商と謂ふ。
- **遷都**
  - 十七代（九）盤庚に至り、水害を避けて都を殷（河南省河南府）に遷し國號を改めて殷と謂ふ。
- **滅亡**
  - 二十八代紂王に至り無道にして虐政を布き忠臣比干を殺し、王族、箕子微子（以上三人を殷の三仁と稱す）の諫を斥け、日夜酒池肉林の樂に耽る周の武王諸侯を率ゐ紂王を伐つてこれを滅す。殷の治世六百餘年。
- **殷の遺臣**
  - **箕子**
    - 紂王を諫めて斥けられ、殷の滅亡後、周に仕ふることを欲せず。逃げて朝鮮に入る。武王よりて朝鮮王に封ず。
  - **伯夷叔齊**
    - 名節の士なり。武王の出陣に當りこれを諫めて父（文王）死して葬らず、且、臣として君を伐つは忠孝の道に悖るを說きたれども聽かれざりき。天下一統するや、周の粟（穀物の實）を食ふを恥ぢ首陽山に蕨を採りて遂に餓死せり。

七　周の代

- **武王の業**
  - 周は帝舜の名臣、稷の後なり。昌（文王と諡す）に至り賢にして諸侯の人望を收め遂に天下の三分の二を保ちその勢甚だ大なり。その子武王繼ぐや、謀臣太公望の計を用ゐて殷を滅し、鎬京（陝西省西安縣）に都して國號を周と稱し、一族功臣を諸侯に封じて王室の藩屏（ヘイ）となせり。
- **成康の治**
  - 武王死してその子成王尙幼なり。武王の弟周公旦、召公奭（セキ）、心を協せてこれを輔佐し善政を施して王室の基礎を固め、制度禮樂を完成せり。次代康王の代には召公これを助けて泰平を致せり。この二代は周の極盛時代にして全く刑を用ひざること四十餘年なりしと云ふ。
- **中興**
  - その後王威漸く衰へ諸侯益々專横にして蠻族の侵略を蒙れり。宣王に至り尹吉甫、方叔等を用ゐて外敵を攘ひ周室一時中興せしも周初の隆盛に復すること能はざりき。
- **東遷**
  - 宣王の子幽王褒姒（ホウジ）を寵して國内亂れ、ついで犬戎に殺されたり。その子平王諸侯に擁立せらるしが難を避けて都を洛邑（洛陽）に遷せり以後を東周と謂ふ。時に皇紀前百十年。

第二章　春秋戰國

一　春秋

意義　周の平王東遷より魯の哀公十四年（獲麟）に至る約三百年間の事蹟は孔子の筆削を加へたる春秋（魯の歴史）に明かなり。故に春秋時代と云ふ。

覇業　周の王室已に衰へ蠻族の侵略益々甚しく天下は殆ど無政府の狀態となり、有力なる諸侯は王室を尊びて夷狄を攘ひ、以て他の諸侯に號令せり。これを覇者と云ふ、その著しきもの五人、世にこれを五覇と稱す。

齊の桓公　賢相管仲を用ゐて富國强兵の實を擧げ王室を尊びて戎狄を攘ひ、南は楚を征しその功業五覇に冠たり（我紀元前後）

管鮑（管仲鮑叔）の交情は古來人の推稱する所なり。管仲の治政方針は「倉廩實而知二禮節一、衣食足而知二榮辱一」に在り。孔子も彼の功を稱へて曰く「微二管仲一吾其被レ髮左レ衽矣」と。

晉の文公　桓公の死後、宋の襄公一度諸侯を會したれども聽て敗死し、晉の文公起りて、王室の難を靖んじ諸侯を率ゐて楚を破り中國を統一して子孫百餘年吳越興起の間もよく覇業を保てり。

秦の穆公　秦は西周の故地に據り、百里奚、孟明視等を用ゐて國を併すこと二十遂に西戎に覇たり。

楚の莊王　楚は春秋の初より既に王と稱して南方に雄視し屢々中原を窺ひしも齊及び晉に妨げられしが莊王に至り晉を破り、中國の諸侯を服して覇者となれり。その曾孫昭王の時吳に敗れ、覇業遂に衰ふ。

越王勾踐　吳王闔閭（カフリヨ）は楚の亡臣伍子胥（ゴシシヨ）を用ゐ楚を破つて國勢盛なりしが後に越王勾踐に破られ傷きて死せり。その子夫差越を破り勾踐を會稽に圍みて、これを降し。遂に中國に入りて覇者となれり。勾踐は名臣范蠡を用ゐ臥薪嘗膽し政を勤むること二十年遂に吳を滅して會稽の耻を雪ぎ勢に乘じて中國を征し覇を稱せり。

統括　支那の諸侯は古へ萬國と稱せしが商の初には千となり。周初に千餘となり、春秋の初に百餘となり、兼併益盛にして强大なる諸侯並び興りて遂に文武を競へり。諸侯の著しきもの魯衞晉鄭吳燕（以上周と同姓）齊宋秦楚陳（異姓）等となれり。

二 戰國

- **戰國七雄**
  - 勾踐歿して越國忽ち衰へ、これより久しく霸を稱するものなし。威烈王以後二百餘年間は弱肉强食の爭愈烈しく舊諸侯は略滅亡して僅に燕秦楚の三國となり、齊はその臣田氏に簒はれまた晉はその臣韓魏趙の三氏に分割せられたり。故に世に戰國の七雄と稱す。
  - **國情**
    - 秦はその地西に僻在し攻むるに難く守るに易し。而も久しく夷狄を以て遇せられ中國諸侯の會盟に與るを得ざりき。
- **秦の强盛**
  - **改革**
    - 孝公發憤勵精商鞅を用ゐて富國强兵の策を講ぜしめ國法を變じ民をして什伍の組合を設けて互に相糾察せしめ耕織を勸め軍功を賞し之を行ふこと十年國力頓に增進せり。
  - **起源**
    - 秦の意氣既に六國を呑む。これを制せんには六國同盟の一途あるのみ。同盟は南北縱に合するに在り。
    - 蘇秦これを策し雄辯を以て燕趙韓魏齊楚の六國を遊說し遂に同盟の長となり、六國の宰相を兼ねて秦に對せり。

- **合從策**
  - **失敗**
    - 秦の利は六國の不和に在り。韓士公孫衍、齊魏を欺きて趙を伐たしむ。趙蘇秦を責む。蘇秦齊に逃げて同盟瓦解す。
  - **起源**
    - 蘇秦の友、張儀合從の失敗を見、秦の爲に六國服從を策し先づ魏を說きて秦と和せしめ、やがて他の六國をも說服せり
  - **失敗**
    - 張儀秦を去りて連衡亦破れ六國再び合從せり。
- **連衡策**
  - **六國滅亡**
    - 六國の合從連衡常なきに乘じ秦は范雎の遠交近攻策を用ゐて益々諸侯を弱め先づ周を滅しついで秦王政立ち六國を滅して天下を一統せり。
    - 蘇秦は洛邑の人なり嘗て遊學し成らずして歸り一族の侮辱を受けて發憤勵精し遂に六國の相印を帶びて歸りしに一族俯伏して尊敬せり蘇秦歎じて曰く「此一人之身、富貴則親戚畏之、貧賤則輕易之、況衆人乎、使我有洛陽負郭田二頃、豈能佩六國相印乎」
  - **當時の世態**
    - 蘇秦張儀遊說を以て成功せしかば風雲を望むの士之に倣ふもの多く諸侯の公子亦爭うて士を招き齊の孟嘗君趙の平原君魏の信陵君楚の春申君等食客數千人を養ひて有事の際にその才能を利用せんとせり。
  - **縱橫の影響**

第三章　周代の制度及び文化

一　制度

中央政府

- 天子の輔佐
  - 三公　太師　太傅　太保
  - 三孤　少師　少傅　少保
  - 共に常置官にあらず。
- 六官（九卿）

官名	長官	職掌
天官	大冢宰	庶政の總理
地官	大司徒	民政　教育
春官	大宗伯	祭祀　禮樂
夏官	大司馬	軍事
秋官	大司寇	刑律
冬官	大司空	工藝

封建制度

- 直轄領
  - 中央にて王畿又は畿甸と稱し方千里（我が方百餘里）
- 諸侯
  - 公侯爵　大國　方百里
  - 伯爵　中國　方七十里
  - 子男爵　小國　方五十里
  - 小國以下は附庸と稱し大國に屬す。

井田法

- 分配
  - 方一里を九百畝とし、これを九分して井田となし、周圍の八區を八家に分授して私田とし、中央の一區を公田とし八家をして耕作せしむ。
- 租稅
  - 租　公田の收穫
  - 稅　力役（庸）　布縷（調）

學制

- 小學　洒掃、應對、進退の節
- 大學　修身齊家治國平天下の道
- 學科は六藝――禮樂射御書數

二　世態

- 禮樂
  - 古へより重んぜられて治國の要具となれり。
  - 樂器……鐘、鼓、琴、瑟、管、籥、笙、磬、等
  - 禮……冠、婚、喪、祭、燕、射、朝、聘、等のうち喪祭を最も重しとなす。
- 喪祭
  - 喪服
    - 喪期甚だ長く父母、舅姑、夫、妻、長子、主君の爲に三年の喪に服す。
    - 他は親疎に應じて長短あり。棺槨、衣衾は善美を盡くす。
  - 祭祀
    - 最も重大なるものを郊祀とし天子親ら上帝を郊に祀る。
- 風俗
  - 階級
    - 天子、諸侯、大夫、士、庶民の五階級に分れ各々衣食住の別あり。
  - 男女
    - 七才以上交際を禁じ男は二十歳にて加冠し女は十五歳にて加笄す。

三 學術

學術興隆の原因

戰國時代は國家の綱紀弛みて制度全く壞れ思想自由となり立身容易となりしかば學者論客輩出して研究益々進み大いに學術の興隆を致せり。就中最も有名なるを孔子及び老子となす。

孔子

略傳

名は丘、字は仲尼、魯に生れ(皇紀一〇八一—一八一)十五歲學に志し三十にして學成り、詩書禮樂を以て弟子を導き、修身齊家治國皆仁恕を本とすべきを敎へたり。五十餘歲の時魯の司寇(法官)となりしも用ゐられずして去り、衞、宋、陳、蔡を周遊すること十八年にして魯に歸り禮を修め、樂を正し、春秋を筆削して後世に傳へ七十四歲として歿せり。論語は孔子の談論を門人の筆錄せしものなり。

儒敎

堯、舜、禹、湯、文王、武王、周公等先聖の維持し實施し來れる、支那の正統思想を孔子が集大成せるものにして孝悌を以て身を修め仁を以て國を治むるを要道となす。爾來支那政治道德の基をなせり。

傳統

孔子の孫、子思、中庸を著し、孟子その統を承けて性善說を唱へ荀子は性惡說を唱へ共に孔子の道を祖述せり。

老子

學說

姓は李、名は耳、字は聃、楚の人なり。孔子と殆ど同時代に出で道德經五千餘言を著す。その說く所は儒家の仁義禮樂に捉はるるを排し無爲自然を以て道德の根本義となせり。

傳統

後に列子、莊子出で、その說を傳ふ。この學派を道家と云ふ。後世これに附會して道敎起れり。

諸氏百家

墨子楊子

兼愛說(功利說)を唱へて儒家の喪祭を重んずるを非難す。
自愛說(快樂說)を唱へて徹底せる快樂說を主張す。

法家

李悝、管仲、申不害、商鞅、韓非、等は專ら法術を以て治國の要道とし儒敎を迂遠なりとす。

兵家

孫武、吳起は兵法を論じて斯道の範を垂る。

詭辯家

惠施、公孫龍、尹文は詭辯を以て堅白異同を論ず。

縱橫家

鬼谷子は智辯を以て權謀術數を說けり。
蘇秦張儀は實にその弟子なり。

第四章　秦の一統

秦王政英略あり。天嶮の地利と廣く天下に求めたる高才逸足の士とを利用して天下を一統せり戰國以來諸侯皆王と稱し、之を以て天子の號となすに足らざるが故に政自身は德は三皇を兼ね、功は五帝に過ぎたりとて自ら皇帝と稱し謚法を廢して始皇帝と謂ふ

内政

皇帝の尊號

秦の始皇帝六國を併せたる後丞相李斯の議を用ゐ從來の封建制度を廢し、秦の舊法に據りて郡縣の制を定め、全國を三十六郡に分ち各各郡に守(民政)尉(軍事)監(監察)を置き中央政府には丞相、大尉、御史大夫の三大官を置き、文字を改定して民心の統一を計れり。

郡縣の制度

人民統御策

諸郡の富豪を咸陽に徙し、民間の兵器を沒收して禍亂の發生を豫防し屢海内を巡遊して帝威を示せり。

一李斯の議を用ゐ醫藥卜筮農業以外の一切の詩

欠

一　漢楚の爭

劉邦の軍政

初め懷王諸將に約して先づ關中に入るものはこゝに王たるべしと宣せり。劉邦の關に入るや父老を招きて王たるべきを告げ且悉く秦の苛法を除き唯〻法三章を約して民望を收む。

項羽の覇業

鴻門の會

項羽大軍を率ゐて後れ至り、鴻門に陣し劉邦の功を嫉み其臣范增の勸めに從ひ之を殺さんとす。劉邦は其臣張良の智謀と樊噲の猛勇とによりて僅に免る。

羽の暴虐

項羽勢を恃みて阿房宮を燒き始皇の陵を發き子嬰を殺して東歸し、陽に懷王を尊びて義帝となし自ら彭城に都して西楚の覇王と稱し、約に背きて劉邦を漢中巴蜀の僻遠の地に封じて漢王となす。

漢の統一

劉邦項羽と天下を爭はんと欲し丞相蕭何將軍韓信謀士張良陳平を用ゐ項羽の義帝を弑せしに乘じて義兵を擧げ、爾來漢楚相爭ふこと四年に及びしが垓下の一戰に項羽大敗し遂に烏江に自殺し劉邦天下を一統して帝位に長安に卽けり。漢の高祖これなり

欠

二　高祖の事業

内政

奠都　天下の地理を案じて都を長安(周の舊都)に定む。

名臣の輩出　帝はその性寛厚にして適材を適處に置くことに留意したれば蕭何張良韓信の三傑以下文武の名臣多く輩出したり。されど晩年に至りては後難を恐れて多くこれらを除きたり。

封建制郡縣制併用　周秦の兩世に鑑み兩制を併用して諸功臣と共に子弟を分封し藩屏に備へしが後ちに韓信英布彭越等の諸功臣多く誅殺せられ劉氏の王國增加してその權力強大に過ぎ却りて後年の禍根をなせり。

外征失敗

秦の時一旦撃退せられたる匈奴は中國の爭亂に乘じて南侵せり。高祖は匈奴の冒頓單于(ボットツ)の入寇を親征して平城に圍まれ、陳平の計によりて僅に免れしよりなるべく和親を結びて一時を糊塗するの方針を取り爲めに後年武帝の大遠征を見るに至れり。

三　文帝の治

呂氏の亂

高祖死し惠帝多病なるを以て呂太后權を專にし惠帝の死後その一族は帝位簒奪を計りしかば陳平周勃等呂后の喪に乘じ諸呂を誅して文帝を迎立せり。

仁政

文帝もと北邊に王たり。よく下情に通じ陳平周勃を用ゐて嚴刑を廢し租稅を減ずる等の仁政を施し、また儉素を旨として只管國庫の充實を計れり。

諸王の驕僭

文帝の寛厚は軈て諸王の驕恣を來しければ賈誼上書し大諸侯の地を割きてその勢力を殺ぐべきを論ぜり。

文帝死して景帝繼ぐに及び諸侯の驕慢甚しく朝命漸く行はれず。景帝因りて鼂錯(チウソ)の議を用ゐて罪過ある毎に諸王の領土を削りしかば吳王劉濞(ビ)は楚趙膠西膠東菑川濟南の六國と共に叛せしが周亞夫(周勃の子)之を平定したり。

四　吳楚七國の亂

原因

結果

爾後諸侯王をば京師に抑留し、官吏を派遣してその地を治めしめければ封建制度は名のみとなれり。

第六章　武帝の事業

一　武帝の外征

- 略說
  - 武帝英略あり。祖父以來國庫豐富の後を承けて外征の師を起し在位五十四年の久しきに亘りて國威を輝かせり。
- 匈奴擊攘
  - 匈奴の侵入
    - 匈奴は冒頓單于の時廣大なる領土を有して塞外に雄飛し高祖は婚を通じ歲幣を贈りてその鋒を避けしより益〻漢室を侮りて屢〻侵入せり。
  - 內蒙古平定
    - 武帝因りて衞青霍去病（青の姪）をして大軍を率ゐて進伐せしめ悉く河南の地を取り遂に軍臣單于を漢北に驅逐して累世の屈辱を雪げり。
- 西域の情勢
  - 當時アム河流域の地に大夏（バクトリア）興りペルシアの地に安息（パルチア）興りしが支那にては黃河の上流地方に月氏及ビ烏孫の二國ありて共に匈奴に攻められ、月氏は遂に匈奴に逐はれて西走し大夏を滅して大月氏を建てたり。
  - 武帝は匈奴を擊つに先だちて張騫を大月氏國に遣り匈奴夾擊を

- 張騫の遠征
  - 計畫せしめたり。張騫途に匈奴に捕へらるゝこと十餘年遂に逃れて大月氏に至り夾擊を說きたれども大月氏は既に復讐の意思なく張騫は目的を達せずして空しく歸れり。途上再び匈奴に捕へられかくて十三年を經て歸國し具に西域の人情風土を奏し且大月氏の隣國烏孫と同盟すべきを說けり。
- 西域交通
  - 武帝その議を用ゐ烏孫と婚を通じて匈奴を牽制せしかば匈奴の勢益衰微せり。これより漢と于闐、大宛、康居、安息等の西域諸國との交通始めて開け西域の產物なる葡萄、苜蓿、胡桃、柘榴等漸次漢に入り來れり。
- 南越征服
  - 兩廣以南に南越閩越の二國興りしが武帝之を征して郡縣となす
- 朝鮮服屬
  - 殷末、箕子朝鮮に入りて王となり平壤に都せしが四十一代箕準の時燕の人衛滿に逐はれたり。その孫右渠漢命に抗せしかば武帝之を滅して四郡を置く。當時半島の南部は馬韓弁韓辰韓の三韓に分れて日支韓の交通漸く行はれ、九州の一酋長は武帝より委奴國王の印綬をさへ受けたり。

二　武帝の內治

學藝の發達

武帝以前

文帝は賢良の士を擧げ又學者を徵用せしより文學稍興りたれども黃老の道を好み、景帝は法家を喜びたりしかば儒學未だ興らざりき。

武帝の奬勵

武帝儒學を好み五經（詩書易禮春秋）博士を置きて經書を講ぜしめ、又博士の子弟を募り、文才ある者を擧用しなどして文藝を奬勵せり。

從つて多くの學者文人輩出し經學共に蔚然として興れり。

學者

- 儒學
  - 公孫弘
  - 董仲舒
  - 孔安國（孔子十一世の孫）
- 散文
  - 司馬遷（史記の撰者）
- 詩賦
  - 司馬相如

欠

二、王莽の簒立

前漢衰亡の原因

宣帝以後は上に名君賢主なく、政權は自ら外戚又は宦官の手に移れり。

宣帝の子元帝の時に宦官、石顯弘恭出でて專横を極めしが成帝に至り外戚王鳳、宦官に代りて政權を握れり。

元帝の子成帝立ち王氏一族權を專にせり。

王鳳の從子王莽恭儉を裝ひて聲譽を博し成帝の大司馬となり。賢者を聘し士を養ひて世を給き遂に平帝を立てゝ自ら太傅となれり。

當時諂諛の風盛にして上書して王莽の德を頌するもの四十八萬人に及ぶ。

簒立

專横

卽位

莽遂に平帝を弑して帝位に卽き國號を新と改めたり。

王莽もと周公に擬せしが故に卽位後諸制度凡て周代に倣ひ法令徒に繁雜を極め且その改廢常なく租稅甚だ重かりしかば叛亂諸國に起り新は十五年にして滅べり。

欠

第八章　後漢の興起

一　漢の再興

- 光武の興復
  - 莽の失政
    - 内政の失敗と共に外は匈奴及び西域諸國に好を失ひしかば人心王莽を去り天下また漢室を懷ふ。
  - 群雄の興起
    - 時に樊崇兵を山東に起して赤眉と號し漢の宗室劉秀は兄劉縯と兵を舂陵に擧げその勢甚だ盛なり。而も諸將統一なし因りて漢の裔劉玄を推して皇帝となす
  - 昆陽の戰
    - 劉秀寡兵を以て先鋒となり、莽の四十二萬の大軍を昆陽に破りて威名頓に揚れり。然るに劉玄は劉縯を忌みてこれを殺し、兵を發して長安に入り王莽を斬る。
- 光武の即位
  - 劉玄の敗死
    - 劉玄長安に都し劉秀に命じて河北を平定せしむ。會〻赤眉の賊長安に入りて劉玄を殺す。
  - 洛陽奠都
    - 劉秀河北を定め鄧禹馮異等諸將の勸めによりて即位し洛陽に都す。之を東漢の光武皇帝となす。

二　光武の施政

- 統一
  - 光武帝既に中原に據り諸將を遣して次第に關中、江淮、燕、齊の群雄を平げ隴西の隗囂を走らし蜀の公孫述を滅し（得隴望蜀）擧兵より十四年にして天下を一統せり。
- 萬機親裁
  - 悉く王莽の弊政を改む。
  - 前代の失敗に懲りて萬機を親裁し武臣を退けて文臣を用ゐ專ら民治に意を注ぐ。
  - 大學を興し禮樂を修め大いに儒學を奬勵せり。
- 名節奬勵
  - 前漢の末は人皆王氏に媚び諂諛風をなせり。光武帝これを矯めんとし處士、周黨、嚴光等を殊遇し敎化を盛にして大いに名節を奬勵せしかば後ち楊震等節義の士多く出でたり
- 明帝と章帝
  - 子、明帝、孫、章帝皆善く遺業を紹ぎ儒を尊び學を重んじ國運益〻隆盛に赴きたり。
  - この時に際し佛敎は印度より東漸して支那に傳來せり。

第九章　佛教の弘通

古代印度

住民

アーリア人

アム河附近の地に發祥せるアーリア人の一派は今より四千年前南下して印度に入り次第に先住種族たるドラビダ人を征服して印度、恒河兩河の流域を占領して數多の國を建てしが後ち生業の別に隨ひ次ぎの四種姓を生ぜり

四種姓

- 波羅門（バラモン）　僧族にして最も尊く學術宗教を掌る
- 刹帝利（クシアトリア）　王侯士族にして政事軍事を掌る。
- 吠舍（ヴァイシア）　平民にして實業に從事す。
- 首陀羅（スードラ）　先住種族にて奴隸として賤業に從ふ

文化

波羅門教

印度アーリア種族の宗教は吠陀（ヴェダ）の經典に出づ即ち宇宙の主を梵天と名づけ靈魂は梵天より出でゝ輪廻（リンネ）するものとし懺悔苦行によりて罪障を滅し轉生の繫縛を脱して梵天に歸（ガン）せんことを目的とせり。

一　佛教の起源

釋迦の出現

僧族の壓制

波羅門は聲明（語學）巧明（星學數學器械學）醫方明（醫學）因明（論理學）內明（哲學）の諸學に通じ學術の盛なること周末にも勝れり。

ゆる暴威を振ひ階級制度の弊その極に達せり。

釋迦牟尼は中印度の迦比羅（カピラ）城（ネパール國の南部）主の子に生れ父を淨飯（ジョウボン）王母を摩耶（マヤ）夫人と稱す。本名を悉達多（シッダルタ）略して悉多太子）と謂ひ西紀前五六五年頃に生る。

學術

釋迦は種族の名。牟尼は賢者。佛陀は覺者の意なり。

釋迦漸く長じて深く人生の無常を觀ぜ二十九歲の時斷然妻子王城を捨て摩揭陀（マカダ）國の山林に入り、初めは波羅門の高僧に就きて學びしが苦行六年の後、波羅門の說の非なるを悟り佛陀伽耶（ブダガヤ）なる菩提樹の下に端座すること四十九日にして解脫（ゲダツ）の道を得ここに佛陀となれりと云ふ。故にその教を佛教と稱す。

釋迦の布教

教旨

釋迦一たび佛教を開くや種姓の別を排して一切衆生の平等を說き、各人皆慈悲博愛の功德を積まば涅槃の境に入り極樂往生を遂ぐべしと敎へたり。

弘通

久しく僧族の壓制に苦みたる諸種族は皆等しくこの新宗敎を歡迎せり。

釋迦は爾來中印度に布敎すること四十年遂に拘尸那(クシナ)揭羅(ガラ)の娑羅雙樹の間に入滅せり。

時に年八十歲　西紀四八六　皇紀一七五

三藏結集

佛陀入滅の年その高弟大迦葉五百の高僧を王舍城に集めて佛說を統一せりこれを第一回の三藏(經律論)結集と云ふ。その後、百年にして耶舍陀(ヤシアダ)七百の高僧を吠舍離(ビシアリ)に會して第二回の結集を行へり。

マウリア朝

西紀前三二七年アレクサンダー大王印度侵略の頃旃陀羅(チヤンドラグプタ)笈多と云ふもの奴隸階級より起りてマウリア王

二　佛教の興隆

阿育王

朝を創め希臘の守兵を驅逐せり。

笈多の孫阿育王は深く佛敎を信じ堂塔を建て國都華子城(今のパトナ)に千人の僧を集めて第三回の結集を行ひまた大に布敎に盡ししかば之より佛敎は西、シリアより東、緬甸(ビルマ)に至り北、中央アジアに弘通せり

王の信佛

後漢の初に大月氏に迎賦色迦王出で國勢頗る强かりしが厚く佛敎に歸依し國都ペシアワルに百丈の高塔を建てまた世友を上座として第四回結集を行へり

迦賦色迦王

當時の建築彫刻に希臘の工人を用ゐしより佛敎美術大いに興れり。之を建陀羅式と謂ひ其面影は法隆寺にも見らる。

建陀羅文明

王の信佛

迦賦色迦王の時後漢の明帝は大月氏に佛敎の隆盛なるを聞き蔡愔を遣りて佛敎を求めしめしかば蔡愔は大月氏より佛經と高僧迦葉摩騰(カシヤバウヤン)竺法蘭(ガチク)を得て歸り洛陽に白馬寺を建てたり。

東流

第十章　東漢の盛世

匈奴の分裂

前漢宣帝の時呼韓邪單于歸降せしより世々漢に仕へしが王莽の亂に乘じて北邊に入寇せり。光武帝の時匈奴は南北二部に分れ南匈奴は漢に降つて長城内に遷り北匈奴は西域諸國を服して屢入寇しければ明帝は竇固等をしてこれを擊破せしめ、又班超をして西域諸國との同盟を計らしめたり。

班超の遠征

班超幼にして大志あり、もと家貧にして父兄（兄班固は漢書の撰者）筆耕を業とするを慨し筆を投じ起ちて遠征の途に上る途に匈奴の使者に遇ふ其從者甚だ多し班超部下を激勵して曰く虎穴に入らずんば虎子を得ずと夜襲ひてこれを殺ししかば西域諸國は皆その勇猛に服せり。

班超西域に在ること三十餘年恩威を以て五十餘國を服し西域都護に任ぜられたり。之より匈奴衰へて西に遷りフン人として歐洲を震駭するに至る。

一　東西交通

大秦と交通

されど班超の後は都護その人を得ず、西域また叛きしかば漢は遂に西域都護府を廢せり。

班超西域に在るや大秦國の隆盛を聞き甘英を遣りて大秦國即ち羅馬に使せしめたり。甘英諸國を巡りてシリアに至り海を渡らずして歸れり。當時羅馬はその領土シリアに及びしが漢の富强を聞き漢も大秦の强大を知り互に交通せんとせしも中間なる安息に妨げられて果さず。後漢の末羅馬帝安敦（アントニウス）は使を發し海路より漢に通ぜり。之より百餘年間羅馬の商人は今の東京地方に來りて貿易せり。

影響

當時支那の輸入品は珠玉瑠璃琥珀等にて其重要輸出品は絹なりき。絹は古くより波斯印度を經て歐洲に傳はり大に羅馬人の嗜好に適し一時は黃金と同一重量を以て交換せられたり。

第六世紀に養蠶の術羅馬に傳はり次第に隆盛に赴き終に今日イタリアの如き蠶業國を見るに至れり。

第十一章　後漢の衰運

一　衰微

- 原因
  - 外戚の禍
    - 光武より明帝章帝の間はよく治りしが四代和帝立ち竇太后の兄、大將軍竇武權を專にせしが爾後幼主多く外戚益々專横となり宦官と勢力を爭へり。
  - 宦官の禍
    - その後桓帝宦官と謀りて外戚梁氏を誅するに及び政權は全く宦官に歸し横暴至らざるなし。
- 黨錮の禍
  - 名節の士
    - 光武帝名節を奬勵せしより氣節を尚ぶの士多く出で宦官の跋扈を見るや、名士李膺陳蕃等大學の書生等と共に盛にこれを攻擊せしかば宦官怒りて黨人と名づけ悉くこれを捕へて或は殺し或は禁錮したり。これを東漢黨錮の禍と謂ふ。
  - 結果
    - 朝政の紊亂せると共に黄巾の賊等諸方に起り間もなく鎭定したれど宦官尚跋扈しければ袁紹遂に悉く宦官を誅滅せり。この時董卓も宦官を誅するを名として洛陽に來り

二　群雄の割據

- 曹操
  - 興起
    - 獻帝を擁して長安に遷りしが間もなく殺されたり。此時天下殆ど無政府の狀態となり、群雄四方に起りて互に相攻伐せしが中にも曹操最も智謀あり獻帝を奉じて黄河の南北を平定しついで襄陽に劉表を攻めたり
  - 赤壁の戰
    - 時に漢の疎族に劉備あり。劉表に依りしが謀臣諸葛亮を得て事を謀り、襄陽陷るに及び亮自ら往いて援を江南の孫權に求む。權之に應じ周瑜を將として曹操の大軍を赤壁(武昌の西)に擊破せり。
- 後漢滅ぶ
  - 劉備建國
    - これより劉備は荆州を定めて孫權と二分し更に西進し巴蜀の地を定めて成都に都せり。
  - 三國鼎立
    - 曹操江北に占據して勢最も强く其子、丕は遂に獻帝に迫りて位を讓らしあ魏國を洛陽に建つ。漢は前後を通じ四百六年にして滅べり。因りて劉備は蜀漢國を成都に建て孫權もまた吳國を建業に建てたり。

第十二帝　三國及び西晉

一　三國攻爭

諸葛亮

諸葛亮字は孔明と云ふ。亂世を避けて襄陽に寓居し自ら樂毅管仲に比す。時人呼んで臥龍と云ふ。

劉備これを聞き三度その廬を訪ひ禮を以て天下の事を計る。亮感激し遂に出廬し備を輔けて蜀漢を建てしむ。備も亮を遇するに水魚の交を以てしたり。

蜀漢は一時吳と荊州を爭ひしが備死して後その子禪を輔け吳と和して先づ南夷を平げ(孟獲七禽)兵を練り糧を蓄へ魏を擊つこと前後七年魏將司馬懿よく防きしかば亮は志を遂げずして五丈原の陣地に歿せり。出征の際禪に上れる前後二回の出師表は至誠忠烈讀者を感泣せしむ。

三國の滅亡

司馬懿屢諸葛亮を禦ぎ漸く武功を積みて權を專にしその子昭の時蜀漢を滅し昭の子炎は魏を簒ひ更に江南の吳を併せて天下を一統し洛陽に都せり。之を西晉の武帝と云ふ。

二　西晉の盛衰

武帝の失政

宗室の優遇

武帝先づ子弟を要地に分封して帝室の藩屏となしが反りて後年諸王の跋扈を來せり。

武備の撤廢

當時塞外種族の內地に雜居するもの頗る多かりしに武帝はこれが豫防を怠りて武備を廢せしかば後年夷狄侵入の基を開けり。

八王の亂

原因

武帝歿して子惠帝嗣ぎ暗愚なり。賈太后政を執る。加之諸王の勢力强大にして各政柄を握らんと欲す。汝南王亮、楚王瑋、趙王倫、齊王冏、成都王穎、河間王顒、長沙王乂、東海王越等交々起りて政權を爭ひ骨肉互に相殘害せり。これを八王の亂と云ふ。

經過

士風頹敗

清談

當時老莊の說盛に行はれ學者多くは禮法を蔑視し世務を排し專ら空理を談ずるを好み皆名教を卑み國事を顧みざりき。これを清談と云へり。

結果

八王の亂夷狄侵入と共に晉室滅亡の因をなせり

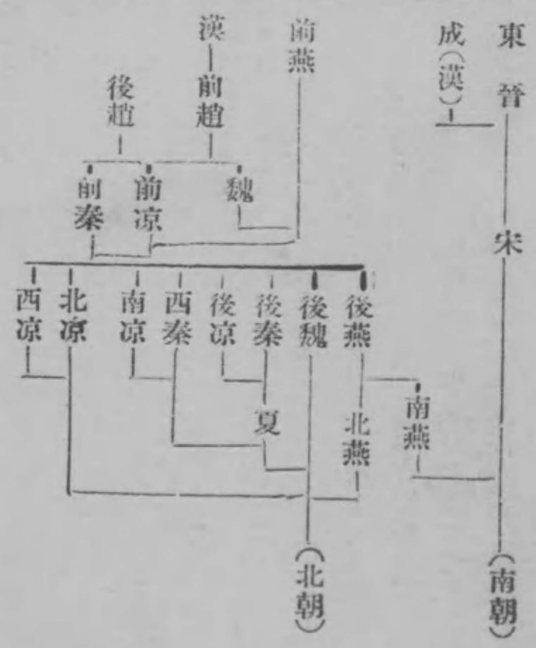
第十三章　五胡及び東晉

一　東晉

- 西晉の滅亡
  - 夷狄雜居
    - 兩漢三國の間塞外種族の支那內地に移住する者多く晉初に至りて益々增加し、就中匈奴、鮮卑、氐羌最も强大なりき。
    - 晉の衰ふるや匈奴の酋長劉淵亂を起し國を漢と號し子劉聰の時一族劉曜、羯人石勒をして晉を滅さしむ。
  - 晉の南渡
    - 司馬懿の曾孫睿建康（南京）に即位し、僅に江南を保ちて晉の統を繼ぎたり。之を東晉の元帝と云ふ。
  - 五胡十六國
    - 爾後三百年間江北は全く蠻族の手に委せられ其間興亡せしもの五蠻族十六國故に五胡十六國と稱す。
- 淝水の戰
  - 前秦の苻堅江北を併呑し九十萬の軍を率ゐて東晉に迫る。東晉の相謝安は姪謝玄をして淝水に邀擊せしめ大に之を破れり。

二　五胡十六國表

人種	國名	建國者	代數
匈奴（トルコ種）	漢（前趙）	劉淵	四
	北涼	沮渠蒙遜	二
	夏	赫連勃々	三
羯（匈奴の別種）	後趙	石勒	七
鮮卑（蒙古種）	燕	慕容皝	三
	前燕	慕容儁	五
	後燕	慕容垂	四
	西秦	乞伏國仁	二
	南燕	慕容德	三
	涼	禿髮烏孤	
氐（西藏種）	成（漢）	李雄	五
	前秦	苻健	六
	後秦	姚萇	四
羌（西藏種）	後涼	呂光	三
漢人	前涼	張軌	九
	西涼	李暠	二
	北燕	馮跋	二



第十四章　南北朝

一　南北對立

- 後魏の興起
  - 江北を一統せる前秦も淝水の敗後衰滅して小邦分立せしが鮮卑の拓跋珪後魏國を建てその勢日に強大となる。
  - その孫太武帝の時遂に江北を一統し西域諸國を招致し、また大擧して柔然を擊ち破れり。
- 東晉の滅亡
  - 淝水の戰後東晉は内亂相繼ぎしがその相劉裕反亂を鎭定し且外征の功を奏し遂に簒立して帝位に卽き建康に都せり。
  - 是に於て支那は南北の二大國となれり。
- 孝文帝の業
  - 後魏は北邊より起り國俗野鄙なり。孝文帝其改革を計り都を洛陽に遷して胡服胡語を禁じ漢族の制度儀式を模し學藝文化は著しく進歩せしが同時に文弱の弊に陷り國力漸く衰ふ
- 北朝の變遷
  - 後魏は内亂繁く遂に東西に分れしが東魏は北齊に簒はれ四魏も北周に簒はれしがついで北周は北齊を併せ更に北周の外戚楊堅は北周を簒ひて帝位に長安に卽けり。

二　佛教流行

- 南朝の變遷
  - 南朝は宋の後ち齊を經て梁に至り梁の武帝は儒學を好み且佛教を尊信し武備を顧みざりしかば國亂れて陳これに代りしが陳もまた隋の文帝楊堅に滅され南北一統せり。
- 南北興亡表
  - 南朝　宋（六〇年）—齊（二四）—梁（五六）—陳（三二）
  - 北朝　後魏（一三七）—東魏（一七）—北齊（二八）
    - 後魏（一三七）—西魏（二四）—北周（二五）—隋
  - 六朝　吳—東晉—宋—齊—梁—陳
  - 右の革命は廢弑によりて行はれたれば宋の順帝の如き「願後身世々勿ニ復生ニ天王家一」以て當時の支那の君主の境遇を察すべし。
- 梁武の崇佛
  - 晉以後佛教流行し特に梁の武帝の頃最も盛なりき、東晉の法顯（往陸復海十二年）後魏の宋雲は印度に法を求め鳩摩羅什（クマラジウ）、菩提達磨は梁の武帝の時支那に來りて教を說けり。
- 日本傳來
  - 佛教は前秦の時始めて高句麗に入りしが百濟は別に東晉より傳へたる後更に日本に傳へたり（欽明天皇十三年）

東洋史

問題

一 漢人種の起源及び發達（商船）
一 齊桓晉文の事蹟（高工）
一 春秋の世并覇者とは如何（陸經理）
一 戰國の世并七雄とは如何（陸經理）
一 井田法（專檢）（山口高商）（女高師）
一 合從連衡（海兵）（高師）（長崎商）
一 合從策（士官）
一 連横（高師）
一 韓非（高師）
一 樂毅（高師）
一 孔子の主義（高師）
一 商鞅（高等）（高師）
一 李斯（高師）（機關）（東高商）
一 秦の始皇帝の事蹟（山口商）（海經理）（士）（高師）（美術）
一 長安（長崎商）（五高）
一 烏江（高師）
一 漢の高祖の治蹟（士官）（美術）
一 古朝鮮の略史（高師）
一 漢の武帝の事業（女高師）
一 張騫（高等）（高師）（女高師）（機關）
一 司馬遷（高師）
一 王莽の事蹟（士官）
一 黨錮（專檢）
一 楊震（高師）

上古史

一 班超（高師）
一 印度の四種姓（高師）
一 釋迦及佛教の東漸（士官）（女高師）（專檢）
一 王舍城（高師）
一 阿育王（高師）
一 迦膩色迦王（高師）
一 佛教東漸の經路（高等）
一 諸葛孔明の事蹟（名高工）（六高）
一 支那三國の國號並にその初代の君主名（海兵）
一 成都（長崎商）
一 兩漢文物の大要（高師）
一 秦以來の歷朝を順に示せ（美術）
一 夏以來の王朝興亡の次第を表示せよ（外語）

第二篇 中古史

第一章 隋の興亡と唐の創業

一 隋の興亡

文帝

一統
楊堅は北朝の最後なる北周の外戚として政を執り遂に北周を簒ひ、ついで南朝をも併せて天下を一統せり。

善政
専ら意を内治に注ぎ勤儉なりしたゞ財政豊かに臣民その堵に安んじその定めたる制度は唐制の基本となれり。

即位
文帝先に長子勇を廢し次子廣を太子となせしが後に之を悔ゆ。廣遂に父を弑して即位す。之を煬帝となす。

煬帝

豪奢
煬帝性豪奢を好み宮苑を造營して結構の美を盡し天下の珍奇を蒐め大運河を開きて江南と河北との水路を通じ長安より江都(今の楊州)に至る間に四十餘の離宮を造りて巡遊の用に供せり。
大運河は文帝の時既に幾分開鑿せられて運漕に便せられしが煬帝更に大工事を起し舊水道を利用して大成せり。

滅亡

外交

日支交通
煬帝三年(欽明十五年)小野妹子隋に遣さる。
翌年答使として裴世清を我國に遣す。

西征南伐
西域諸國を招致して洛陽に互市を開かしめ又林邑(柴棍 流求(臺灣)吐谷渾(青海)なも降す

東征失敗
文帝高句麗を征して失敗せしが煬帝更に征し再三失敗し國力いたく疲弊せり。

原因
煬帝はかく土木に外征に財力を盡し人民を苦しめければ天下皆亂を懷ふに至れる折しも高句麗征伐に大失敗せしかば叛亂忽ち四方に起れり。

結果
これより先き唐公李淵太原に留守たりしがその子世民と共に兵を擧げて長安を陷れ遂に帝位に即き長安に都せり時に煬帝は遊覽して江都にありしがその臣宇文化及の爲に弑せられたり。

二 唐の創業

高祖

唐の興起

唐の高祖李淵は煬帝の命を受けて太原に留守せしが突厥と戰ひて敗れしかば罪を得んことを恐れ世民と兵を起し突厥の援を借り長安を陷れて恭帝を立てついでその讓を受けて長安に帝位に上れり。

天下一統

時に煬帝東遊して江都に在り日夜酒色に耽りて北歸の志なく遂にその下に弑せられたり。

高祖心を内政に留め次子世民をして四方に割據せる群雄を討伐せしめ七年にして天下を一統せり。

即位

高祖を助けて擧兵せしめ兵を率ゐて太下を一統す。

文學館を開き房玄齡杜如晦、褚遂良、孔穎達等を招きて館の學士となし名聲日に高し。

兄、太子建成、弟元吉嫉みて害せんことを謀る。

世民先づ發して二人を殺しついで高祖の讓を受けたり。これ名高き太宗なり。

太宗

貞觀の治

概說

太宗は儒學を奬勵し且能く名臣を用ゐて意を政治に注ぎ治績大いに擧れり。

外は突厥及び西域を服し高句麗回紇を降して國威を振へり。故に貞觀の治と云ひ秦漢以來比なき泰平と稱せらる。

諸名臣

- 賢相
  - 房玄齡…諸政を統べて善く謀る
  - 杜如晦…事に處して能く斷す。
- 將軍
  - 李勣
  - 李靖
- 諫臣
  - 魏徵
  - 王珪
- 學者　孔穎達　五經正義の撰者
- 佛者　玄奘　天山南路より印度に入り研究十七年經典五百餘部を將來す

第二章　唐の制度——大寶令の母法

中央官制（三省六部）

三省	職掌	長官	次官		
中書省	詔勅の宣奉	中書令			
門下省	詔勅の審査	侍中			
尚書省	詔勅の施行	尚書令	左僕射（ボクヤ） 右僕射	吏部 戸部 禮部 兵部 刑部 工部	宮吏任免 戸口租稅 禮儀教育 軍事律令 刑獄 工藝

外に一臺九寺五監あり。之等を總稱して京官と云ふ。

地方官制

全國を十道に分つ。道（巡察使府縣を監督す）州（刺史）縣（令）

田制稅法

均田法　十八才以上を丁男とし各官田百畝を給す。

（租—下男粟二斛

一　制度

- 租稅
  - 庸—丁男毎年二十日の勞役
  - 調—鄉土の產物
- 兵制
  - 全國に六百三十四の折衝府を置き各府の常備兵約千人とし全國總丁男の三分一以内を徵集す。府兵は租稅を免除せられ毎年冬季に於て武藝を練習し又一年交代に番上し宮城を守護す。
- 學制
  - 學校
    - 京都　國子學、大學、四門學
    - 州縣　府學、州學、縣學
  - 官吏登庸法
    - 受驗資格
      - 生徒　學校卒業者
      - 鄉貢　州縣の檢定合格者
    - 受驗科目
      - 明經試驗　經書の義理
      - 進士試驗　詩賦
- 刑制
  - 五刑　笞杖徒流死、その輕重すべて二十等
  - 年中行事　五節句　追儺
- 風俗　女子の纏足　男子の蓄爪　喫茶

第三章　唐代に於ける外國

一　外國經略

東西突厥

トルコ族にして南北朝には柔然を滅して蒙古及び中央アジアを領し高祖舉兵の際之を助けて功あり。後ち東西に分れ東突厥は太宗の時李靖に西突厥は高宗の時蘇定方に滅さる。

波斯、大食

漢代に東西交通を妨げたる安息は波斯に滅ぼされ波斯はまたアラビアに興れる大食（サラセン帝國）に滅されたり。これより支那とサラセンとの交通起れり。

吐蕃（チベット）

吐蕃は唐初勢強く唐と青海地方を爭ひしが後ち和を請ひ婚を通じ（トバン）

印度

ぜりその南隣なるネパール、印度の諸國も唐に來聘せり。

新羅統一

前漢の末滿人朱蒙朝鮮に入りて高麗を建て其子溫祚は百濟を創め朴赫居世の建てたる新羅と鼎立し神功皇后以後我國に服屬せり。然るに新羅强盛にて任那日本府を陷れて百濟を侵し百濟は高麗と同盟して我國の助けを仰ぎしかば新羅孤立し遂に唐の助を求む

三國

一　統一

日支交通

我國は隋と交通せしより彼我の往復絶えず盛に彼の制度文物を輸入せり。

都護府

かく太宗高宗以後國威四方に延び唐の勢力範圍愈擴大せしかば唐は六都護府を置きてこれを統治せり。

高宗蘇定方を遣し新羅と協力して百濟を滅し高麗をも併せ平壤に安東都護府を置きて半島を統制せり。後ち新羅叛き平壤を陷れて全く半島を統一せり。

都護府	所在地	管轄區域
安東	初め朝鮮平壤、後に遼東城	滿洲朝鮮
安北	初め外蒙古都斤山附近、後に陰山の麓	外蒙古
單于	山西省大同府の西北雲中城	內蒙古
北庭	新疆省迪化府	天山北路
安西	初め高昌、後に龜茲（庫車）	同南路及中亞
安南	東京の河內	印度支那

第四章　唐代の東西交通

一　大貪人來航

- 商圏擴張
  - サラセン帝國のその領土を印度まで擴張するや貿易も隨つて發達し商範圏も印度洋岸は勿論、更に東に進みてマライ諸島、印度支那及び南清地方に及べり。
- 市舶司設置
  - 稅關を設け提舉市舶を任命して關稅を徵收せり。
  - 場所　交州（東京）　廣州（廣東）　泉州（福建）杭州（浙江）
- 輸入商品
  - 象牙　犀角　香料　棉花　胡椒

二　諸宗教東傳

- 祆教
  - 開祖を波斯人ゾロアスターと云ひ陰陽二神を立て陽神は正善明の支配者、陰神は邪惡闇の支配者にて二神は常に相爭ひ陽神終に勝利を得べしとする宗教にて明の象徵なる火を拜するを以て一に拜火教と稱せられ唐初波斯より傳來せり
- 回教
  - ムハメッド教も東漸して天山南路にも行はれついで支那に入れり。回紇人の信奉せしより回教又は回々教と云ふ。
- 景教
  - 基督教の一派にして第五世紀に羅馬の僧ネストリアスが三位一體說に反對して破門せられシリアに來りてその教を孔めしかば遂に波斯中央アジアにも弘まれり。
  - 太宗の時波斯人阿羅本（オロパン）その經典を齎して長安に來り太宗の尊崇を得たり。のち德宗の時大秦寺の僧景淨（アダム）長安に大秦景教流行中國碑を建ててその由來を明かにせり。
- 佛教
  - 玄奘は太宗の時、義淨は德宗の時、印度に入り經典を將來して盛んにこれを飜譯しければこれより佛教益流行せり。
  - 最澄空海等の入唐は德宗の時代のことなり。

三　文化の發達

- 原因
  - 海陸に於ける東亞交通盛んに行はれ且つ佛教の隆盛に赴きたる結果唐代の文化は大いに發達せり。
- 繪畫
  - 佛畫　吳道玄
  - 山水　李思訓（北宗畫）　王維（南宗畫）
- 印刷
  - 印刷は隋に初まり唐代に佛書の刊行盛んなり。
  - 活版は北宋に至りて發明せらる。

第五章　唐の中世

- 出世　性明敏且つ權略あり才人より遴みて高宗の皇后となる。
- 一　武韋の亂
  - 武氏の亂
    - 專恣　高宗多病によりて政を執り、高宗崩ずるや子、中宗を立てやがて之を廢し次子睿宗を立てしが遂に唐の宗室を殺し睿宗を廢して自ら帝位に即けり。則天武后これなり。
    - 結末　後ち十五年宰相張柬之武后に迫りて中宗を復位せしむ。
  - 韋氏の亂
    - 專恣　中宗復位するや皇后韋氏政治に與りしが遂に中宗を弑して自ら政を執り群小を愛し忠良を斥けたり。
    - 結末　隆基兵を起して韋后を殺し次睿宗を立てついでその禪を受けたりこれを玄宗皇帝となす。
- 內政
  - 開元の治　即位の初め名相、姚崇、宋璟を用ゐ勵精治を圖りければ國富み兵強く文學技藝並び起り天下泰平にして戶口繁殖しければ後世之を開元の治と稱して貞觀の治と並稱す。
  - 文學一　文學の時李白、杜甫出でゝ從來の詩風を一新し後韓愈柳

- 二　玄宗の政治
  - 節度使設置　武韋の亂三十年に亘り爲に蠻人の侵入を招きしかば玄宗邊要の地に十節度使を置きてこれに備へたり。
  - 新道教　宗元出でゝ文體また一變し詩文共に空前の發達をなせり道教は老莊の說に佛說を加味せる一種の宗教にて南北朝に成立し玄宗の時唐の正教となりしより頗る流行せり
- 三　安史の亂
  - 元宗の晚年
    - 奸臣李林甫を用ゐ又楊貴妃を寵して奢侈に耽りければこれより政治紊れて武備弛み遂に安史の大亂を惹起せり。
    - 祿山は胡人なり狡獪にして深く楊貴妃に結び玄宗の信任を得て平盧范陽河東の三節度使を兼ねしが遂に叛して洛陽を取り更に長安に迫りしかば玄宗蜀に走りて位を肅宗に讓れり。この役張巡顏果卿等國難に殉ぜり。
  - 安祿山の叛
  - 鎭定
    - 肅宗郭子儀李光弼等に任じ回紇の助を得て兩京を恢復せり時に祿山は其子慶緒に慶緒は其將史思明に思明は其子朝義に朝義は其將李懷仙に殺され懷仙降りて八年の兵亂全く平げり

第六章　唐の滅亡

- 概説
  - 唐は安史の亂後國勢頓に衰へ外は蠻族の侵略を被ふり内は藩鎭の跋扈宦官の專横に加ふるに財政の困難を以てし遂に滅亡するに至れり。
- 原因
  - 蠻族の侵
    - 回紇
      - 突厥を滅し漠北を領せしが安史の亂に唐を救ひしより益尊大となり歲幣を貪り婚を迫り又屢北邊に寇せり。
    - 南詔吐蕃
      - 西南の蠻族南詔は四川安南を掠め吐蕃は一時長安を陷れしことあり。
  - 藩鎭の跋扈
    - 安史の亂後内地にも節度使を增置せしが節度使の勢漸く强大となるや朝廷もその歡心を買ふに努めしかば遂には朝命を奉ぜざるに至れり。
  - 財政の困難
    - 亂後稅法壞れ節度使は租稅を私し國庫益窮乏しければ德宗の時兩稅の法を行ひて却つて失敗せり。

一　唐の衰亡

- 宦官の專横
  - 元宗の時宦官の數著しく增し漸く權力を得て文武の政權を握り遂に天子をも廢立するに至れり。
- 黃巢の亂
  - 僖宗の時黃巢と云ふ賊起り累年諸道を侵掠せしが遂に長安に入りしかば僖宗蜀に走れり。
- 滅亡
  - 李克用
    - 克用は西突厥の一部なる沙陀の部長なり。黃巢の賊を平げ功を以て河東の節度使となり後に晉王に封ぜられたり。
  - 朱全忠簒立
    - 之より天下愈亂れ群雄四方に起りて互に相攻爭せり。時に黃巢の將朱全忠唐に降りて節度使となり兵勢益盛にして河北の諸鎭を併せしが昭宗の召に應じて長安に入り宦官數百人を殺せり。
    - 全忠迫りて都を洛陽に遷さしめついで昭宗を弑してその子哀帝を立て遂にその禪を受く、梁の太祖之なり。唐は二十代二百九十年にして亡ぶ。

第七章　五代及宋の初世

一　五代

概說　唐の滅亡後五十餘年間は爭亂擾奪烈しく行はれ其間に五國興亡せり

- 後梁
  - 始祖朱全忠、開封に都す。もと黄巢の將なりしが唐に降りて遂に帝位を奪ひ李克用と爭ひその子、克用の子存勗に滅さる。二世十七年
- 後唐
  - 始祖李存勗、洛陽に都す。明帝閔帝を經て從珂の時河東を領して威名ありし石敬塘契丹の太宗の助を得て之を滅す。四世十四年
- 後晉
  - 始祖、石敬塘、開封に都す。約により燕雲十六州を契丹に上りしがその子重貴契丹に背いて滅さる。されど契丹驕て北に歸る二世十一年
- 後漢
  - 始祖劉知淵、開封に都す。もと晉の將たり。契丹の太宗北歸するや自立せしがその子隱帝はその將郭威に滅さる。二世四年
- 後周
  - 始祖郭威開封に都す。子世宗は英武にして支那一統の志ありしが果さずして崩じ恭帝立つ宋の太祖趙匡胤に簒はれたり。三世十年
- 士風頽敗
  - 革命紛亂の結果道義節操全く地を拂へ、馮道の如き唐晉遼漢周の五朝十一君に歷仕して將相たりしを當時寛厚の長者として推重せり。

二　宋の統一

- 太祖
  - 即位
    - 趙匡胤、五代紛亂の後を承け諸將に推されて帝位に即き汴に都せり。之を宋の太祖とす
  - 中央集權
    - 唐末以來節度使の跋扈益甚しく五代の變革の如き多く節度使の簒奪に起因せり。故に太祖は宰相趙普と計り機會ある毎に文官を以て補充し漸次その權力を削りて中央集權を行ひ多年の宿弊を一掃せり。爲に生民兵革より免れて休養するを得たれども却つて兵力の薄弱を來し外國の侮を受くるに至れり。
  - 內政
    - 內政の整備と共に諸將を遣して宋の正朔を奉ぜざるものを討平せしむ。獨り北漢は遂に降らざりき。
  - 外政
    - 太宗立ち太祖の志を繼ぎ北漢を討ちて之を降し海內始めて統一せり。當時交趾は叛服常なかりしかば太宗これを征せしも炎熱の爲に失敗し交趾遂に獨立國となれり。

三　宋の外難

宋と遼

契丹の興起

南朝の頃より潢河附近に居りし滿洲族より耶律阿保機（エリアボキ）出で渤海及び回紇の地を併せて皇帝と稱し臨潢に都せり。契丹の太祖之なり。子太宗の時後晉を助けて後唐を滅しやがて後晉をも滅し開封に據りて國を遼と號せり。

澶州の役

宋の太宗遼を討つこと十年遂に成功せず。子眞宗の時遼軍大擧して入寇するや親征して澶州に防ぎしが遂に歲幣銀十萬兩絹二十萬匹を遼に與へて和せり。

遼の極盛

當時朝鮮にては新羅衰へて高麗半島を一統せしが遼に朝貢せしかば聖宗の時遼の領土、西は天山に達し東は日本海に臨み朝貢するの高麗吐蕃回紇黠戛斯等六十國に及べり。

西夏の興起

西夏は西藏族にして夏州に住せしが李元昊の時勢强大となり興慶に都して西夏と稱し屢宋の西邊に侵入せり。

欠

新法の弊

新法の趣旨必ずしも惡しからずと雖勢ひ收斂苛求の傾なきを得ず。中にも青苗法はその害最も甚だしかりしかば富弱、歐陽修、司馬光、蘇軾等祖宗の制に育くを非難しこれより新法舊法二派の黨爭起り政權を爭奪すること三十餘年に及べり。

外征失敗

神宗國内の改革を終へたれば、まづ西夏を滅し交趾を降し遂なも伐たんと企てしが何れも失敗し内外愈多事となれり。

新舊黨爭

元祐の更化

神宗崩じて哲宗立ち皇太后新法黨を斥けて司馬光等を擧用せしが間もなく司馬光死し舊法黨も洛（程頤）蜀（蘇軾）朔（劉摯）の三派に分れたり。

蔡京の專横

太后崩じて哲宗親政し舊法黨を貶して新法を復活するや蔡京朝に立ち司馬光等數十人を姦黨と名づけ政を執ること二十年威福を恣にし權勢朝野を傾け宋室漸く衰ふ。

一毎年その肥瘠を檢し時に賠償せしむ。

欠

第九章　金の興起、宋金の交渉

一　金の興起

金の太祖

- 女眞
  - 通古斯族に屬し松花江附近に住し靺鞨と稱せられ初め渤海に屬し後に遼に服せり。
- 阿骨打
  - 完顏部の長阿骨打（アクダ）雄略あり、遼の衰微に乘じて屢遼兵を破り、女眞を一統して皇帝と稱し、會寧（吉林）に都して國を金と號せり。金の太祖これなり。

遼の末世

- 宋金同盟
  - 遼の天祚帝金を親征して松花江に至り大敗す。宋の徽宗は童貫の議を用ゐて遼を討たんと欲し、金と同盟を結び金は中京を取り宋は南京を取り成功の曉には宋は燕、雲十七州を收め金には宋より遼に與へし歲幣を贈るべきを約せり。
- 遼の滅亡
  - 金は中京西京を取り、天祚帝をたふして遼を滅せり。然るに宋將童貫は失敗せしかば宋は金に歲幣を增し偖に南京（遼の）附近を得たり。

二　宋金交渉

金軍南下

- 金は宋の不振に乘じ、大舉して南下しければ、徽宗已を罪して位を子欽宗に讓り、急に勤王の兵を募りて、これを防ぎしも、金は國都開封を陷れ、欽宗徽宗以下皇族男女千餘人を捕へ、掠奪を恣にして北に歸れり。

秦檜の專横

- 宋は欽宗の弟高宗即位し金を避けて南渡し臨安に都せり。この時には李綱、岳飛、韓世忠等の忠臣ありて連りに金軍を破り學者また主戰論に加はりて、宋の勢漸く強くなりしかど、高宗怯懦にして和を望めるに乘じ、秦檜盛んに講和を唱へ岳飛、韓世忠等を斥けて斷然講和し、歲幣銀絹各二十五萬を納めて金の封册を受け、淮水、大散關を以て兩國の境と定め、金は高宗の母韋氏等を還せり。

宋金の小康

- 金の太祖の孫廸古乃立つに及び都を燕に遷して一統を計り大舉して采石に迫り宋將虞允文に破られたり世宗の時宋と和してよく國内を治め南北共に休息する事三十年に及べり。

第十章　宋代の文物

- 儒學
  - 性理學
    - 漢唐の學者は四書五經につきその訓詁注疏にのみ專なりしが宋代に至りては佛教殊に禪學研究の進歩と共にその影響儒學の上に及びてこゝに性命理氣のみ起り萬物の理を窮めたり
    - これを性理學又は道學と云ひ周敦頤その開祖なり。しかも當時の學者は一般に政事軍事又は文筆の才あるもの多かりき。
  - 諸名儒
    - 北宋
      - 周敦頤（通書、大極圖說）　邵雍（皇極經世）
      - 張載（正蒙、東銘、西銘）　程顥（定性書）
      - 程頤（易傳、春秋傳）
    - 南宋
      - 朱熹
        - 周張二程の說を取りて宋の儒學を大成せり。
        - 之を程朱の學又は朱子學と云ふ。
        - 著書　四書集註、小學、近思錄、通鑑綱目
      - 陸九淵
        - 朱子の格物致知に反對して得性心悟を說く、明の大儒王陽明は實にこの統をひくものなり

一　宋の文物

- 詩文
  - 概說
    - 宋初は五代の弊を承けて、詩文共に浮華纖巧を免れざりしが、歐陽修出でゝ古文を唱導せしより文運大に振興せり
  - 大家
    - 詩人
      - 歐陽修、梅堯臣、蘇軾、黃庭堅、
      - 歐陽修、蘇洵、蘇軾（號東坡洵の子）蘇轍（軾の弟）曾鞏、
    - 文人
      - 王安石之に唐の韓愈、柳宗元を加へ唐宋八大家と云ふ
- 史學
  - 歐陽修の新唐書、司馬光の資治通鑑、朱熹の通鑑綱目等著はれ、皆史界の珍なり。殊に資治通鑑は司馬光が勅命により十九年の歲月を費して編成したるものにて、その史實、文章共に後世史家の嘆稱する所なり。
- 美術
  - 畫家　李公麟（宋代第一）　佛畫に長じかねて山水をよくす）
  - 書家　蔡襄、宋の太宗、蘇軾、米芾（書畫兩道に達す）
    - 徽宗繪畫を好みて奬勵しければ繪畫著しく進歩せり。
- 佛教
  - 禪宗盛に世に廣まり、宋初に大藏經出版せられ、儒者も大抵佛說を研究するもの多く陸九淵の說も禪宗に基けりと云ふ。

問題

一 淝水の戰（高師）（東高商）
一 後魏の孝文帝（一高）
一 隋の煬帝の事業（高師）
一 唐勃興の次第（機關）
一 唐太宗の事蹟（專檢）（四高）
一 唐の帝都（專檢）
一 則天武后（士官）
一 唐室叛亂の主なるもの（機關）
一 唐と朝鮮との關係（高等）
一 安祿山（高等）（神戸商）（海兵）（名高工）
一 顏眞卿（長崎商）
一 唐代外國領土統治法（高師）
一 大食（高師）
一 唐代中央政府の組織（高師）
一 杜甫（高等）（海兵）
一 道教（士官）（高等）
一 景教（高師）（專檢）
一 韓愈（高師）（美術）
一 玄奘（高師）（專檢）（海兵）
一 唐代文化の有樣（美術）
一 唐代藩鎭跋扈の由來（士官）
一 王安石（五高）
一 王安石の新法（士官）（高師）
一 王安石の新法の影響及びその主要項目（東高商）
一 司馬光（高師）

一 宋金の關係（高師）（廣高師）
一 阿骨打（高師）
一 宋に松ける朋黨の爭（東高商）
一 西遼の興亡（海兵）
一 金の四都（海兵）
一 宋朝の名臣（士官）
一 宋代に於ける儒者の學風（高等）
一 岳飛（高師）（高等）
一 宋代著名の學者三人（三高）
一 朱熹（高師）
一 陸象山（高師）

第三篇 近古史

第一章 蒙古の興起

興起

蒙古はもと黒龍江の上流オノン、ケルレン兩河流域に遊牧し世々遼金に屬せしが也速該(エスガイ)に至り近傍諸部落を併せて勢强大なり。その子鐵木眞(テムチン)雄略あり東は塔々兒(タタール)を滅して父の讎を報い西は乃滿部長太陽汗(タヤン)を斃し內外蒙古を併せて大汗の位に即き成吉思汗(强盛なる君主)と號せり

蒙古の大祖是なり(一二〇六)

南侵

成吉思汗塞外を一統せる時恰も西夏は內憂に困みしかば攻めて之を降し更に進んで金を伐す。金は河北を割きて和を請ひついでその都を汴京に遷すに及び金を征して燕京を取れり。

西遼興起

歐、亞、弗、三大陸に跨りしサラセン大帝國も唐末より次第に衰へ、セルジュク土耳古西域に勢を振ひしが間もなく衰へ遼の耶律大石(エルダーシ)西侵して中亞に西遼國を建てたり。

滅亡(太陽汗の子屈出律(カチュルク)來奔しついで花剌子模(ホラズム)の助を得て西遼を

一 成吉思汗

花剌子模

一ひ蒙古に復讎せんとせしが却つて敗北せり。

トルコ族にてセルヂユクに隸せしが遂に之を仆して獨立し西亞細亞に號令せり。ムハメッド王の時屈出律を助けて西遼を滅しその報酬として中央アジアをも領し勢力を負ひて蒙古の隊商及び使者を殺せり

西征

太祖凱りて四子(ヂュチ)求赤、(チャガタイ)察合台、(オゴダイ)窩濶台、(ツルイ)拖雷、と共に花剌子模に侵入し國都撒馬兒干(サマルカンド)を陷れしかばムハメッドは西に逃れて裏海の一島に憂死せり。

蒙古軍の一隊は更に進みて大和嶺を越えロシアを征して歸れり。

西夏討平

太祖西征より歸り直ちに兵を出して西夏を滅し更に金を討ちしが六盤山(甘肅省)に至り疾を獲て歿せり。

クリルタイ

大汗は父子相繼に非ずして全國中名望力量最大なる人物を推す習慣なり。この選定及び征討の大事を決する爲に開かるゝ大會議をクリルタイと稱し諸王族酋長等會合する定めなり。

第二章　太宗及び憲宗

一　太宗の業

金の滅亡

太祖歿し三子窩濶台大汗となりて都を和林（カラコルム）に奠め父の遺志を繼ぎて金を親征せり。金の哀宗蔡州に出奔し宋の助を求めしが宋の理宗は反りて蒙古と通じて夾擊し金は建國百二十年にて滅べり。ついで東の方高麗も降して屬邦となせり。

拔都の西征

太宗西方經略を企て拔都を元帥とし皇子貴由（クユク）拖雷の子蒙哥（マンゴ）等之に從ひ宿將速不台（スブタイ）を先鋒とし總軍五十餘萬先づロシアを侵略し進みて一軍は匈牙利（ホンガリア）を焚掠し一軍は波蘭（ポーランド）に入りて北歐聯合軍を粉碎しければ全歐爲に震駭せしが會々太宗死して諸軍東歸し拔都獨り留りてロシアに欽察汗國（キプチャク）を建てたり。

蒙古の軍法

一旦抵抗せし者は必すこれを殺しその一耳を斬り取る南露侵略中其の耳二十七萬あり

しと云ふ歐人は此の侵入を以て上帝の下せる惡魔と信じ盛に祈禱を行へりと云ふ。

二　憲宗の業

即位

太宗の後その子貴由立ちて定宗となりしが間もなく死し拖雷の子蒙哥推されて大汗となれり。之より太宗の一族は不平を抱き後年蒙古大汗國の分裂を來し蒙古帝國滅亡の一因をなせり。

旭烈兀西征

當時ペルシアには回教の一派なるイスマイルの教主クヒスタンに都し回教のカリフは尙バグダードに在りしが旭烈兀進擊しクヒスタンを陷れて教主を降しバグダードを取りてアッバス朝を滅し更に進みてシリアを定め埃及侵入を企てゝ果さざりしも西アジアに伊兒汗國を建てたり。

忽必烈南征

忽必烈四川より入りて大理國を降し吐蕃（チベット）を討平しついで交趾も亦降れり。よつて憲宗自ら兵を以て忽必烈と共に宋を討滅せんとす宋の理宗賈似道をして防がしむ。似道宋に秘して歲幣を約し和を請ふ會ゝ憲宗死し忽必烈は一旦宋と和して北に還れり。

第三章　元の一統

一　一統の業

世祖の即位

憲宗歿するや忽必烈に快からざるもの忽必烈の弟阿里不哥(アリブカ)を推して大汗たらしめんとせしかば忽必烈急ぎ宋と和して北に歸り開平(カイヒン)に至りて自ら大汗の位に上れりこれを世祖となす。都を燕に定めて大都と名づけ開平を上都となし國號を建てゝ元と稱せり。

世祖は漢人の儒者を任用して文化を輸入するに力め又諸般の制度を定め或は喇嘛(ラマ)の拔思巴(パスパ)を用ゐて帝師となし命じて蒙古文字を作らしめなどしたれども太宗の一族は世祖の即位に異議を唱へて之より永く不和の狀態にあり。

宋の滅亡

宋は賈似道權を弄して專横を極め且つ元に對して前年の約を踐まざりしかば世祖大に怒り宿將伯顏(バヤン)等をして大舉南下せしめたり。時に宋の恭帝位にあり賈似道を貶したれども元の大軍迫りしを以て遂に出で降れり。

二　宋末の誇

勤王の諸士

こゝに於て陸秀夫、張世傑、文天祥等勤王の軍を起ししが相次ぎて皆敗れ國都臨安遂に陷り宋は建國より三百十七年にして滅び元全く支那を一統せり。

陸秀夫、張世傑等恭帝の兄端宗を奉じて福州に至りしが元軍に迫られて高州に崩ぜり。陸秀夫等その弟昺を立てゝ厓山に遷りしが元の將張弘範に攻められ秀夫は昺を負ふて海に投じ世傑は溺れ文天祥は捕へられしが屈せず遂に殺されたり。

文天祥

文天祥は宋末を飾る忠勇義烈の士なり。學に富み文を能くし官、丞相に至る。忠義の心厚く終身宋を恢復するを以て己が任とし元軍の入寇するや勤王の軍を起ししが敗れて捕へられる。元將張弘範切に歸順を勸めたれども聽かず。燕京に至りて土窟の獄に繫がれしがかの有名なる正氣の歌を作りてその志を示し遂に獄中に死せり。我藤田東湖、吉田松蔭も之にならひて正氣の歌を作れり。

三 世祖の外征

高麗の降服

高麗は先きに蒙古に降りしもその變風を厭ひて服せざりしかば時々元の攻擊を受け世祖の時全く蒙古に降服せり。

高麗の忠烈王は世祖の女を迎へて妃となし且質子を元に送り親らも入朝し内治外交共に元の命を奉じ全く元の外藩となれり。

日本侵略失敗

時宗の英斷

唐末遣唐使廢止後宋代には彼我の交通は僧徒商人の往復するに過ぎざりき。元の世祖我國を招致せんと欲し高麗王に命じて國書を遺りしが執權時宗其文辭無禮なるを怒つて之を斥けたり。

文永の役

世祖は蒙古、高麗(忠烈王)の兵三萬餘を發して文永十一年壹岐對馬に入寇せしめしかど成功せざりき。翌年時宗また元使杜世忠等を斬りて西海の防備を嚴にせり

弘安の役

弘安四年元高麗の軍に江南の水軍を加へて總勢十四万人九州に入寇せしが我軍の防禦にあひて利を失へる折しも大風起り元軍大敗し大將范文虎は逸早く逃れたり

世祖は我邦に失敗したれども元の武威は爲に挫けたるに非ず。宋を平げたる勢に乘じて南方諸國を征服して朝貢せしめたり。

南洋諸國征服

概說

元は大理國を亡ぼすや進みて緬の國都を陷れ朝貢を約せしめたり。

緬國

世祖先に安南を降しゝが其南隣なる交趾は招きに應ぜざりしかば攻めて之を降し

交趾占城

尋いで占城(柴棍)も降りければ世祖は更に進みてスマトラ、ジャバをも招致せり

第四章　元代の東西交通

一　蒙古極盛時の範圖

概說

太祖の興起より世祖まで五代八十年の間頻りに東攻西征し、したれば元の範圍は北部アジア、南部印度を除けるアジア及び東部ヨーロッパを包括し世祖は大汗としてこの空前の大領土を支配せり中に諸王の強大なるもの四部あり。

四汗國

汗國名	始祖	首都	疆域
察合台汗國 窩濶台汗國 欽察汗國 伊兒汗國	察合台 窩濶台 拔都 旭烈兀	アルマリク エルケ 也迷里 サライ マラゲア	西遼の故地 乃滿の故地 露西亞及附近 西南アジア

概說

蒙古の領土歐亞二大陸に跨り加ふるに從來諸所に割據せし小國悉く滅亡して交通上の危險減少せしかば東西の交通陸に海に頻繁となり諸港市の發達を來し中にも泉州の如き當時第一の貿易港となり外商の來り住するもの數萬に及べり。

二　東西交通

外人任用

理由

大帝國統一上人種の差別なく廣く才能者を登用し西洋文明の輸入に努めたれば歐人の來り仕ふるもの頗多かりき。

外人

- 耶律楚材（エリツサイ）　西遼人　編輯經籍所の總裁
- 八思巴（パスパ）　吐蕃人　帝師　佛教學者
- マルコポーロ　ベニスの商人の子なり十七歳の時父と共に支那に來り世祖に信任せられ四十一歳にて歸國し後ち國亂の爲に獄に下されたり。有名なる東洋見聞錄は獄中の作にて書中ジパング（日本）なる國名は始めて歐洲に知られたり。
- イブンバツタ　マロツコ人　一生に七萬五千哩を旅行せしを以て知られ元の順帝の時支那に來れり。

基督教徒の布教

當時西歐人は十字軍に熱心し蒙古と同盟してムハメツド教徒を滅さんと欲し羅馬等の使者和林に來れり。之より宣教師等入り來るもの多く寺院を建てゝ盛に布教せり。

第五章　元の衰運

一　元朝衰亡の原因

- **繼承の亂**
  - 憲宗大汗となりしより太宗の子孫なる察合台汗國の諸王不平を抱きしが世祖の經略に暇なきに乘じ太宗の孫海都（ハイドゥ）反旗を飜し察合台汗國、欽察汗國の諸王を誘ひて中央アジアを占領し推されて大汗となれり、爾後相爭ふこと四十年にして世祖の孫成宗の時察合台汗國を滅したれども爲に元と諸汗國との關係殆ど絶え諸王獨立の姿をなせり
  - 相續法は父子相續によらずしてクリルタイにて決定せらるゝが故に相續の紛爭起り權臣其の間に擁立の功を負ひて專横を極め朝政爲に紊亂せり。
- **權臣の跋扈**
- **喇嘛教流行**
  - 世祖吐蕃を征するやその地に行はるゝ佛教の一派なる喇嘛教を信じ統治の必要上喇嘛（喇嘛僧）八思巴（パスパ）を帝師となし〻より元の歷代の君主喇嘛教を尊信し佛事供養の費用頗る多く國庫爲に窮乏せり。

- **財政の紊亂**
  - 原因
    - 世祖外征に力を用ゐ加ふるに海都の叛亂ありて連年の兵戰やむときなく且喇嘛尊信の結果一層財政の窮乏を來せり。
  - 結果
    - 鹽、鐵に課稅し貿易牧畜を官營とし徵稅法嚴密なりし上に交鈔（紙幣）を濫發して經濟界を紊亂したれば人民の怨望漸く增大せり。
- **漢人の不平**
  - 元代は文教も亦興り漢人の登用せらるゝものありしかど將相の重位は蒙古人に限られその下に他種族を用ゐ漢人は全く顧られざりき。且つ喇嘛尊信の極は多く舊制を破り宋の諸陵を發きなどして益々漢人の憤激を招けり。
- **元朝の滅亡**
  - 民心全く元を離れ不平の徒所在に亂を作せり。中にも朱元璋兵勢最も振ひ連勝して大都に迫りければ元の順帝は開平に遁れ元遂に滅びぬ。（一三六八）

第六章　明の初世

明の太祖朱元璋もと窮民にして僧となりしが元末騒亂の間に處して漸く勢を得遂に金陵を取りて之に據り徐達、常遇春を用ひ元朝を逐ひて中原を定めたり。即位の後は詔して胡俗を禁じ支那の衣冠に復せり。

一　太祖の業

武功興起

一統

元の餘黨の尙北邊に在るものを擊破し漠南蒙古及び滿洲の地を定め蜀、雲南地方をも征して天下を一統せり

政治

封建制度

宋の孤立に鑑み一族二十四人を要地に封じ北邊の諸王には特に兵權を重くし却りて後難を招けり。

内政改良

内政の改良を圖りて唐宋の舊制を復し大明律を定め文教を興せり。

胡藍の獄

性殘忍猜疑心强く身後を慮り先に宰相胡惟庸等三萬餘人を誅し後に藍玉等一萬五千人を殺して武臣跋扈の憂を絶たんとし却つて禍は骨肉の間に起るに至れり。

二　成祖の業

靖難の役

太祖死して孫惠帝即位するに及び諸王の强大を憂へ或は地を削り或は王を廢して大に諸王の怨を買へり。

燕王朱棣（惠帝の叔父）遂に叛し諸王を誘ひて南侵し宦官の内應を得直ちに金陵を陷れて帝位を奪へり之を成祖（永樂帝）となす。この時侍講方孝孺節を守りて難に殉せり。帝は燕京を改めて北京となし後に都を茲に遷し舊都金陵を南京と稱せり

交趾征服

交趾は先に陳氏王位に在りしがこの時胡季犛（ヒボク）篡立せしかば成祖陳氏の裔を助けて季犛を滅し交趾布政司を置けり。

南海經略

鄭和に命じ海軍を率ゐて南海を歴訪せしめたり。然れども遂に惠帝を獲る能はざりしが爾來二十五年間に海外に航すること前後七回、スマトラの酋長を擒にすること三回大に明の國威を輝したれば之より南洋諸國皆明に來貢し又明人の南洋に通商するものまた多かりき。

第七章　帖木兒大王

一　帖木兒大王の業

興

起

元朝の滅亡と共に察合台（チャガタイ）、伊兒（イルキ）、欽察（キプチャク）の三汗國も亦衰へ殊に察合台汗國は相續の爭より東西に分れて相攻爭しとも衰微せり。

時に成吉思汗（チンギス）の後裔帖木兒（ティムール）サマルカンドに起りて察合台汗國を平定し都をサマルカンドに奠めたり。これらの戰に帖木兒傷いて跛となりければチムルレンク（帖木兒跛）の稱を得しより西人は訛りてタメルランと云ふ。

伊兒汗國

旭烈兀（フラグ）の曾孫合贊（ガザン）汗の時憲法をつくり國政を改良し羅馬法王と同盟して十字軍を助け又歐洲諸國の文明を輸入して國運隆盛なりしがその死後漸く衰へしがば帖木兒之を併合せり。

一正統絶えて紛擾せる時帖木兒は拔都の疎族

攻

欽察汗國

トクタムシを助けて一統せしめしがその叛服常なきを怒り親征して之を降せり。

印度侵略

帖木兒更にトグラグ王朝の衰微せるに乘じ疾風の如く印度に侵入しその國都デリーを陷れたり。

土耳古進擊

當時小亞細亞を領して勢を振へる土耳古のバジヤジッド王は東羅馬を滅さんとせしかば帖木兒は東羅馬の求めに應じアンゴラに戰ひてバジヤジットを擒にせり。

病

死

帖木兒は更に明を滅して世界を一統せんとし大擧東征せしが中途に病死し明は幸にその侵略を免れたり。

帖木兒の死後子孫位を爭ひて版圖崩壞せしがその五世の孫バーベルに至り印度に莫臥兒（ムガール）（モンゴールの訛）帝國を建設せり。

第八章　明の衰亡

外難

土木の變

瓦剌部長也先（エッセン）、外蒙古の西部及天山北路を占領し勢に乘じ元の遺族を擁して明に入寇せり。

英宗親征して土木に戰ひ大敗して擒にせられしが後ち和議なりて還るを得たり。之を土木の變と云ふ。

韃靼入寇

元の子孫韃靼可汗と稱せしが達延（ダヤン）可汗の時内外蒙古を一統し之より屢明に入寇せしが穆宗の時好を通じ爾來北邊事なし。

倭寇侵略

元末我國邊陲の豪族等私に明韓に通商し無賴の徒之に加はりて沿岸を劫掠せり明人之を倭寇と云へり。

明の太祖沿岸に防倭衛所を設けて之に備へしも効なかりしが足利義滿以後明との交通興るや倭寇一時止みたれど足利氏衰微と共に復興り明の邊民と結びて江の南北を寇掠せり。

衰亡の原因

内患

朝鮮の役

世宗の時殷大猷之を鎮定せしも餘黨は尙臺灣に據りて近海に出沒せり。

高麗は元滅びて明に從ひしが將軍李成桂（イソケイ）擁立して王となり漢陽に都し國號を朝鮮と稱せり之を太祖とす。

八世の孫李昖（エン）の時豐臣秀吉の攻略に遇ひしかば明はその請に應じて援軍を出しゝが大將李如松は大敗し爲に國勢いたく衰へたり。

宦官專横

太祖は宦官の參政を禁じたりしが成祖は内應を德として信任せしより遂に專横を極め爲に内亂起りしが王守仁の力により討平するを得たり。

朋黨の爭

神宗の時朋黨の爭起り顧憲成は東林黨を率ゐて政府を攻擊し一時政權を握りしが反對黨は宦官と聯合し悉く東林黨を排斥して政を執り朝政爲に大に紊亂し明朝の衰亡を速めたり。

第九章　歐人の東航

東漸の由來

蒙古大帝國は東西交通を頻繁ならしめしがオスマントルコ勃興するに及び東西通路を阻礙せしより西人は海路發見の必要に迫られたり。

加ふるにマルコポーロの東洋見聞錄は印度、支那、日本等の富有なるを說き且つ十三世紀の後半支那より磁針の傳來あり。

太子ヘンリー航海を奬勵せしかば探檢航海に從ふもの多く

葡人の東航

一四九八年バスコ、ダ、ガマは喜望峯を廻りて印度のカリコに達せしより東航者頗る多く遂にゴアを根據地とし更に東略の歩を進めて南支那海に入り澳門に占據して廣東。寧波に商館を設けたり。

天文十二年には我國にも來りついで肥前の平戸に商館を設け永く東洋貿易の覇權を握れり。

一　歐人の東航

西人の東航

葡萄牙人と反對に西航を企て一四九二年コロンブスはアメリカを發見しついで一五一九年マゼランは西航して大平洋に出でフイリピン群島を占領せり。西班牙人はこれよりマニラを中心として支那貿易を企てしが葡人に妨げられて果さず、轉じて我が平戸に來りて貿易に從へり。

蘭人の東航

和蘭は西班牙より獨立せし後ち東洋貿易を始め漸次葡西兩國人の植民地及び商權を奪ひ爪哇（ジャバ）のバタビアを中心としてスマトラ、ジャバ、ボルネオ、マラッカ等を經略し進みて我國及び支那とも貿易し遂に東洋貿易の覇權を握れり。

基督教東流

歐人の東航と共に宣教師の布教を試みる者多かりしが中にも舊教の一派なるエスイタ派のフランシス、ザビエルは印度日本に布教し後支那に至りて死せり。ついで同派のマテオリッチ（利瑪竇）は廣東に布教し燕京に入り明の神宗の許を得て北京に會堂を建てしより高貴の歸依者も多かりき。

第十章　元明の文化

一　元代の文藝

- 略説
  - 元代は名儒文人に乏しからずと雖も將相は胡人より出で學士の待遇輕かりしかば學問の隆盛は唐末に及ばざりき。
- 戲曲小説
  - 元代に於て大成せりと稱せられし戲曲には高則誠の琵琶記王實甫の西廂記最も著名にして小説には施耐庵の水滸傳あり その趣向文章共に千古に冠絶すと稱せられる。以上の三書に通俗三國志を加へて元代の四大奇書と云ふ。
- 科學の進歩
  - 天文學者には李冶あり測面海鏡を著す。
  - 數學者には托克托等の編せる遼金宋の三史あり。
- 史學その他
  - 史學には托克托等の編せる遼金宋の三史あり。
  - 書家には趙子昂最も名高し。

初世

- 明初の儒者は先つ宋濂。方孝孺に指を屈す、宋濂は元の遺儒を以て明の太祖に仕へ程朱の學に通じ兼ねて詩文に長せり。その弟子方孝孺は惠帝に事へて謀議に參し

二　明代の文化

- 儒學
  - 末葉
    - 王守仁出で陸九淵等の説に基きて道は我が心に求むべく事物に求むべからずとて良知良能説を唱へて姚江派を開けり。之より朱陸の爭は轉じて朱子學陽明學の爭となり我が德川時代に官私の學として對立せり。
  - 明末遺儒
    - 明末昏亂の世に儒學復興し黄宗羲、顧炎武、李顒等出で何れも程朱の流を汲み博學多識なり。皆清朝に仕へず殊に黄、顧二氏は兵を擧げて明室恢復を計りたりき。
- 本草學
  - 明時大に進歩し李時珍三十餘年を費し本草綱目を編む
- 文藝
  - 詩文
    - 共に振はず殊に文章は八股文とて受驗論文の形式の定まれるものとなりたり。
  - 戲曲小説
    - 頗る盛にして戲曲には牡丹亭還魂記小説には西遊記金瓶梅あり水滸傳三國志と共に支那小説四大奇書と云ふ

成祖に捕はれしが節を守りて死せり。時人「方氏を殺さば天下讀書の種子　えん」と云ひしとぞ。

明時大に進歩し李時珍三十餘年を費し本草綱目を編む

東洋史

問題

一 成吉思汗（長崎商）
一 成吉思汗の西征（海兵）
一 拔都（海兵）（六高）（士官）（高師）（女高師）（機關）
一 蒙古軍の歐洲侵略（專檢）
一 クリルタイ（海兵）
一 忽必烈（東高商）
一 和林（高師）
一 文天祥（高師）（東高商）（女高師）
一 陸秀夫（高師）
一 崖山役（士官）
一 交鈔（高師）
一 范文虎（高師）
一 最盛期の元の版圖（高等）（機關）
一 元寇當時の元の勢力範圍（美術）
一 元代の朝鮮（高師）
一 元代歐亞の交通（山口商）
一 マルコポーロ（外語）（高等）（高師）（士官）（機關）
一 哲別（海兵）
一 帖木兒（チムール）大王の事蹟（士官）
一 建業は今何處（高師）（機關）（海經）
一 方孝孺（長崎商）（專檢）
一 倭寇（海兵）
一 八幡船（神戸商）（機關）（高等）（海經理）（東北農豫）（機關）

近古史

一 足利時代に於け我國外交の概況（名高工）
一 時代に於ける我邊民の侵略大略（海兵）
一 李成桂（外語）（七高）（海兵）（高等）（專檢）
一 朝鮮の興起（八高）
一 明末に於ける葡人西人の東方經略（士官）
一 葡人東航の由來（機關）
一 葡人西人の植民（商船）
一 ゴア（高等）
一 澳門（高師）
一 明末清初耶蘇教徒の事業（高師）
一 フランシス、サビエル（專檢）（八高）（長崎商）
一 マテオリチ（利瑪竇）（高師）（士官）
一 王守仁（山口商）
一 明の滅亡（機關）
一 鄭成功（國姓爺）（士官）（名高工）（高等）（外語）（機關）（海經）（東北豫）
一 慶長年間に於ける支那の情況（東高商）
一 鄭和（高師）

第四篇　近世史

第一章　清の興起

一　清の開國

- 太祖の業
  - 興起
    - 金の滅亡後滿洲族久しく屏息せしが明末に至り努爾哈赤（ヌルハチ）と云ふもの赫圖阿拉（ホドアラ）（興京）に崛起し愛親覺羅部（アイシンギョロ）の長となり次第に滿洲族を征服して遂に皇帝の位に即き國を後金と號せり。之を太祖とす。
  - 奉天奠都
    - 太祖之より明の邊境を侵し明將楊鎬の大軍を破り進んで瀋陽（奉天）遼陽を取り遷つて瀋陽に都せり。
- 太宗の業
  - 朝鮮征服
    - 先きに朝鮮は明に通じて夾擊せしかば太宗これを征し國都京城を陷れて仁祖を降し封册を受けしめたり
  - 南侵
    - 太宗勢に乘じ一擧して直ちに北京を陷れんとし山海關に迫りしが偶々漠南に爭亂ありければ轉じて蒙古に入りこれを征服せり。
    - ついで國號を改めて清と稱せり。

二　世祖の業

- 明の滅亡
  - 明末政治紊れ財政窮乏して國民苛稅に苦しみけゐ折しも流賊李自成陝西に起るや四方の暴民之に應じて北京に入りければ毅宗自殺し明は建國二百七十七年にして滅べり。
- 支那一統
  - 世祖、明將吳三桂と山海關に對陣中李自成北京を陷れしかば三桂清に降り世祖は自成を討ちて北京に遷都し北部地方を征服して辮髮令を布けり。
  - 時に明の諸王江南に據り羅馬法王及び我國に援を請ひしが勢漸く蹙まりて桂王は緬甸に入り魯王は臺灣に入り支那本部は悉く一統せられたり。
- 鄭成功
  - 明の遺臣鄭芝龍と云ふ者肥前の平戸に來り日本人を娶りて成功を生む。清の江南を侵略するに及び成功父と共に勤王の軍を起し魯王を奉じて浙江を復し南京を降して一時盛なりき。
  - されどその後戰敗れ德川幕府に援を求めたれども聽かれず遂に王を奉じて臺灣に退き蘭人を逐ひてこの地に據れり。

第二章　聖祖及高宗

一　聖祖の業

康熙の盛世

略説

聖祖は聰明古今に比類少き英主なり在位六十一年恭儉にして勵精治を圖り其文德武功高きが故に清朝は永く異人種たる漢人に愛戴せらるゝに至れり。

文德

その文德の大なる者を擧ぐれば制度を定め學術を奬勵し國内の名儒を登用して大部の書を作らしめたり、また白耳義人南懷仁（フェルビースト）を用ゐて曆局を司らしめ自らも深く學を好み曆算律にも精通せり

三藩の鎭定

世祖の時降將吳三桂、尙可喜、耿繼茂、を夫れ〳〵雲南、廣東、福建に封じて明の遺族を鎭壓せしめたり。然るにその勢漸く强大となり兵權を握りしかば聖祖その勢力を減殺せんとせり。

よりて吳三桂先づ叛し耿繼茂の子耿精忠、尙可喜の子尙之信之に應じ漢人の辮髮を嫌へるものまたこれ

武功

臺灣の平定

朱成功（明の姓を賜る）の子、經、父の志を繼ぎ屢清に攻め入りしが三藩の鎭定と共に孤立して援なくその子克塽（コクサウ）遂に清に降れり。

當時露國は漸く東侵の歩を進め遂に雅克薩（ヤクサ）を取りてアルバジン城を築けり。

尼布楚條約

聖祖よりて愛琿城を築きて之に備へしが後ち蘭人を介してペテロ大帝と講和し兩國の全權尼布楚（ネルチンスク）に會し外興安嶺（エルゲナ河）を以て兩國の界となせり。

準噶爾征服

也先（エツセン）の裔噶爾丹（ガルダン）、準噶爾部に興り青海西藏、天山南路を定め遂に外蒙古の喀爾喀（カルカ）部を侵せり。喀爾喀より救を清に求めければ聖祖親征して平定せり。

西藏の平定

噶爾丹の姪策妄阿拉布坦（チエワンアラブタン）、準噶爾を奪ひ西藏に侵入せしかば聖祖之を討ちたり。

二 世宗の業

- 喇嘛教の分裂
  - 喇嘛はもと紅衣紅帽をつけ元代より尊信せられてその弊漸く大なりしかば明初宗喀巴(ツオンカバ)出でゝ新喇嘛教を建てたり新派は黄衣黄帽をつくるが故に前者を紅教喇嘛後者を黄教喇嘛と云ふ。
  - 宗喀巴の二弟子達賴喇嘛(ダライ)班禪喇嘛(パンツェン)その教を傳へ外蒙古、青海及び西藏の全部之に歸せり。西藏は聖祖の時清に服せしがまた叛きたれば世宗兵を遣りて之を平定し駐藏大臣を置きてこれを鎮壓しまた青海地方をも平定せり。
- 西藏の鎮定
- 天山南北路の平定
  - 世宗殁し高宗嗣ぐに及び準噶爾の内訌に乘じ阿睦爾撒納(アムルサ)を助けて征服せしめのち阿睦爾撒納叛するや高宗また攻めて天山北路を平定せり。
  - 更に阿睦爾撒納の叛を援けたる噶什喀爾(カシガル)をも破りて天山南路を取りしかば清の威名は遂に葱嶺以西に振ひ好を通ずるもの少なからざりき。

三 高宗の業

- 印度支那諸國の朝貢
  - 緬甸
    - 明末以來數部に分れて爭亂ありければ高宗之を征して朝貢せしめたり。
  - 暹羅
    - 暹羅は一時緬甸に併せられしかば清の緬甸を征するや漢人鄭昭興りて暹羅王となり都を盤谷(バンコク)に奠めて高宗の封册を受けたり。是れ卽ち現暹羅王家の祖なり。
  - 安南
    - 時に阮文岳、阮文惠兄弟起り廣南大越を取りて安南を一統し東京を侵ししかば高宗東京を助け安南を討ちて朝貢せしめたり。
- 乾隆の盛世
  - 高宗(年號乾隆)在位六十年治世の長きと武功の大なると共に聖祖に劣らず。而して十度武功を立てたりとて自ら十全の記を作れり。
  - されど内地にも爭亂多く外征も亦完全なる効果を擧げ得ずして隆盛の中に已に衰替の徵歷々たるものありしが如し。

第三章　清の制度及び學術

一　制度

中央官制

- **内閣**　政務を總括する所にて大學士四人協辨大學士二人を置き、吏、戸、禮、兵、刑、工の六部之に屬す各部の長官を尚書、次官を侍郎と云ふ。
- **理藩院**　内外蒙古、天山南北路（後に新疆省として六部の管下に移る）西藏、青海を管理す。
- **都察院**　有司百官を監察す。
- **軍機處**　軍國の大事を決する爲に設置せられ高宗の時内閣大學士及び各部の尚書侍郎等から敕選して軍機處大臣となし以て軍國の大事を議決せしめしより勢漸く強大となり終に天下の政權は擧げて軍機處にて決裁せられ内閣は名のみとなれり。
- **海軍衙門**　海軍を統制す。
- **總理各國事務衙門**　外交の繁くなりしより新設せられたり。

地方官制

- **區劃**　支那本部は十八省に分ち天山南北路は一省とし省の下に府、州、縣を置き別に滿洲は三省に分つ。
- **官吏**　大抵二省毎に總督一人その下に巡撫提督を置き大抵一省一人にて巡撫は民治を掌り提督は軍事を司る。その下に知府知州知縣あり。滿洲は各將軍を置きしが清末には總督巡撫を置くに至れり。

兵制

- **陸軍**
  - **八旗**
    - 滿洲八旗　皇室の親兵にして滿洲及び皇城守護の任に當り全帝國の要所を守備す。
    - 蒙古八旗
    - 漢八旗
  - **綠營**　漢人よりなり各省を鎭撫す。
  - **鄉勇**　長髮賊の時創設せらる。
- **海軍**　北洋、南洋、長江、福建、廣東の五水師に分れ十九世紀末には稍隆盛なりしも日清戰役に北洋水師全滅して以來全く振はず。

二 學術

- 聖祖高宗の奬勵
  - 略說
    - 清は國初以來國子學府學州學縣學を設けて學術を奬勵し中にも康熙乾隆の二帝は深く學を好み多くの儒者を召して勅撰の大事業を完成せり。
  - 勅撰書
    - 聖祖
      - 淵鑑類函　康熙字典　佩文韻府　皇清經解　全唐詩　四朝詩等
    - 高宗
      - 大清一統志　大清會典　皇朝文獻通考　明史　四庫全書提要等
- 儒學
  - 考證學
    - 宋學流行せしより訓詁の學廢れ殊に陽明學行はれて學者は專ら理論を尙びその末派の如き甚だしく空疎なる學說を弄するに至りしかば清初に顧炎武等出で立論は必ず證據を古典に求めたり。之れを考證學と云ふ。
  - 學者
    - 顧炎武　黃宗羲　毛奇齡　閻若璩　崔述
- 文藝
  - 文
    - 賦
      - 王士禎　吳偉業
    - 章
      - 朱彝尊　侯方域
  - 詩
    - 唐宋時代に及ばざること遠し

- 科學
  - 地理歷史
    - 錢大昕　勅撰事業…支那全帝國圖
  - 曆算學
    - 徐光啓…新法算書　梅文鼎…曆算全書
    - 勅撰　曆象集成　數理精蘊　律呂精義
- 宗教
  - 佛教
    - 漸く衰微の傾あり
  - 喇嘛教
    - 西藏蒙古
  - 回教
    - 天山南北路陝甘地方
  - 基督教
    - 開港場大都市
- 西洋學術の輸入
  - 明末以來基督教徒、中にもエスイタ教會の宣教師にして支那に來るもの多かりしかば清の世祖はアダムシアール（湯若望、獨逸人）を用ゐ聖祖はフェルビースト（南懷仁白耳義人）を任用せしより代々西洋人を用ゐて西洋學術の輸入に力めしかば支那の曆法砲術數學は一變せられたり

第四章　莫臥兒帝國の盛衰

大王の曾孫アブサイド（ウズベック）歿してその領土分裂せしかば

- 帖木兒以後
  - 欽察汗に屬せし月即別汗（サマルカンド）を取りて中央アジアを占領しヒバ、ブハラ二汗國を建てたり。
  - アブサイドの孫バーベル故國恢復を圖りて成らず。
  - カブールに退きて隱忍し兵力を蓄へ印度の爭亂に乘じてパンジャブに攻め入りデーリを陷れて莫臥兒（ムガール）帝國を創建せり。ムガールはモンゴールの轉訛なり。
- 興起
- 莫臥兒帝國
  - バーベルの孫アクバル賢明にして雄略あり頑强なるラジプト族を滅してアム河より印度河の下流に至るまでを平定し都をアグラに遷し制度を定め文學を奬勵せり。
  - 當時印度にては佛教既に衰へて波羅門教の一派なるヒンヅー教流行せる所に回教徒侵入し來りたれば宗教上の爭絕えざりき。アクバル即位の始めヒンヅー教徒と婚を通じ從來
- アクバル大帝

- 回教徒たる王が土人に課したる非回教稅を廢し且印度人をも官吏に登用せしかばヒンヅー教徒の心服を得て南印度の外悉く歸服し國勢大に振へり。
- アクバルの曾孫アウランゲゼブの時大軍を發し南印度を平定して全印度を一統せり。
- 然れども回教に歸依するの極再び非回教稅を課して土人の叛亂を招き鎭定半にしてアウランゲゼブは遂に陣中に歿せり。
- 衰微
  - この後諸帝何れも庸暗にして叛亂を鎭定すること能はず國勢愈衰へたり。
  - 滅亡
    - 折しもイギリス人の東洋經略益其の歩を進め漸く印度を蠶食し終に總督カニングの爲に廢せられたり

第五章　英國の印度經略

英人の東洋貿易の開始は十六世紀なりしも葡西兩國人に妨げられて發達せざりき。

一　英人の經度印略

英人の東漸

然るに一五八八年西國の無敵艦隊を擊破せしより東印度會社を設け印度貿易を興して漸く勢を張りマドラス、ボンベイ、カルカッタを根據地として葡人蘭人を壓倒せり。

佛人の東漸

佛人も英人と殆ど同時に東洋經略を始め印度に來りてポンディシエリー、シャンデルナゴルを根據地とし東洋貿易を獨占せんとして英人と衝突せり。

英佛の競爭

ポンディシエリーのフランス知事デュプレースは一時マドラスを占領して英人を壓倒せり。

時に英國東印度會社の書記クライブ勇敢にして才略あり忽ち身を軍隊に投じデュプレースの歸國後シアンデルナゴルを陷れついで僅三千の寡兵を以て佛人印度人の聯合

軍七萬をプラシーの一戰に大勝して大局を制し遂に全く印度の商權を握るに至れり。

莫臥兒皇帝廢止

ヘースチングスはクライブの後を承けて莫臥兒帝國の侵略に着手し始めて印度總督となりて諸般の改革を斷行せしより歴代の總督皆經略の方針を繼續し遂に莫臥兒皇帝に年金を與へ總督は全く印度を支配しついで皇帝を廢せり。（一八五七）

印度帝國の創立

かく印度は東印度會社の下に治められ從つてその間に弊害もありければ英國政府は印度の政治改革を名としその政權を收め女王ビクトリアは印度女帝の位に即きたり。（一八八七）

ついで緬甸を侵略し遂にこれを英領印度に併合し更に馬來半島の諸小國をも保護國となせり。

第六章　阿片戰役、長髮賊の亂

一　阿片戰役

原因

英清阿片貿易

- 英國の對清貿易は葡人に妨げられて振はざりしが印度經略後東印度會社は本國政府の保護を得て大にその商權を擴張せり。
- その商品の重要なるものは印度產の阿片にして清人の嗜好に投じたり。然れどもその國民の經濟身體生命に及ぼす害毒甚大なりしかば清國は輸入を禁止したるも禁令少しも行はれず密賣益盛なりき。

林則徐の斷行

- 宣宗、林則徐を兩廣總督に任じてその輸入禁遏に當らしめたり。されど英人の密賣尙止まざりしかば則徐は斷然英人の通商を禁じ英商に迫りその所藏の阿片二萬餘函を出さしめて燒棄したり。
- 英國は通商復活を迫りしかど林則徐は斷然之を拒せり。

英清交渉

- よりて英國は通商保護を名として兵を起しブレーマーは艦隊を率ゐて南清沿岸の諸港を封鎖し別將エリオットは艦隊を率ゐ渤海に入りて白河河口に迫りしかば清國大いに驚き林則徐をやめて和を計りしが朝議一變し再び林則徐を起して戰爭を繼續せり。されど清軍戰ふごとに敗れ英軍は廣東、寧波を取り吳淞（ウスン）を陷れ驍將陳化成を殺し進みて南京に迫りしかば清國遂に和を請ひ南京條約を結べり。

南京條約

全權委員

- 英　ポッチンヂヤー
- 清　耆英　伊里布

結果

- 香港割讓
- 償金　二千一百萬兩
- 開港　上海　寧波　厦門　福州　廣東

二　長髮賊の亂

原因

廣東の地は夙に歐人通商の盛なる所なれば基督教徒亦隨つて多し阿片戰役後清廷の威大いに減じ人民また帝室を重んせず會々兩廣の地饑饉起りしかば盜賊各地に蜂起せり。

廣西の人洪秀全兵を擧げ滿洲の俗を排して髮を蓄へしめたり故に長髮賊と云ふ。且天下に檄して「天下は中國の天下にして胡虜の天下に非ず。寶位は中國の寶位にして胡虜の寶位に非ず。」と謂ひしかば漢人の來り從ふもの頗る多く勢日に盛なり。ついで國號を建て、太平天國と稱し歐米人の同情を得んゝ爲に自らは天帝の次子(基督の弟)なりとて制令一に西洋に倣ひ奴隷賣買婦人の纏足を禁止したり。

宣宗の子文宗立つや賊勢益熾にして江南一帶を占領し南京に都して江北を窺ひしかば文宗勤王の軍を募り曾國藩、李鴻章、左宗棠等立ち義勇兵を率ゐて賊を

結果

破りしかど賊勢容易に衰へざりき。

曾英佛聯合軍の侵擊ありて討伐の捗々しからざるうちに洪秀全は浙江を浸し上海に迫りしかば穆宗援を外人に請ひ米人ワルド英人ゴルドン等洋槍隊を組織し連りに賊軍を破りて常勝軍の名を博したり。

常勝軍

ついでワルド死しゴルドン常勝軍の將となり曾國藩等と共に南京を圍みしかば洪秀全毒を仰いで死し十六年に亘る內亂平ぎたり。

鎮定

これより益清國は疲弊して外人の侮を被るに至れり

戈登

ゴルドンは大膽にして勇氣あり其戰に臨む常に彈丸雨注に處して號令常の如し亂後清朝の巨萬の財を以て酬いんとせしを辭して受けず。後ち故國に歸り更に埃及經略に從事せしが不幸スーダンにて戰死せり

三 英佛の侵入

開戰

アロー號事件

- 發端
  - 清國は長髮賊に惱さるゝに當り外國との葛藤起れり。
  - 清國が阿片戰役の結果五港を開きしより外國との通商頻繁なるに隨ひ有罪の支那人には外國船に投じて逮捕を免るゝもの多かりき。
  - 一八五六年(咸豐六年)廣東の官吏英船アロー號を臨檢し壇に清人十二名を捕へ去りしかば
- 英清交涉
  - 香港知事パークス抗議したれど要領を得ざりしかば艦隊を以て廣東を砲擊し清人は上海の英館を燒けり。
  - 會佛國宣教師廣西に於て害せられしを名とし佛國皇帝ナポレオン三世は英國と聯合して先づ廣東を陷れ渤海に入り太沽の砲臺を占領し天津に迫りしかば清國は和を請ひ天津條約を結べり

戰

- 清佛交涉
  - 翌咸豐八年英佛公使は批准交換の爲めに北京に向ひたるに突然太沽より砲擊せられたり。
- 太沽占領
  - 英佛公使は船艦百餘隻を率ゐて太沽天津を取り僧格林沁(サンコリンチン)の兵を破りしかば清帝熱河に蒙塵し英佛軍は遂に北京に入りて圓明園の宮殿を燒けり

北清侵伐

- 再戰
  - 皇弟恭親王命を承けて和をはかり露國公使イグナチェフその間に立ちて調停を試み先に諦結せる天津條約を修正し左の如く議定せり。

北京條約

- 締結
- 結果
  - 償金
    - 英國に　一千二百萬兩
    - 佛國に　六百萬兩
  - 基督教弘布許可
  - 開港　牛莊、漢口、登州、潮州　臺灣、瓊州、九江
  - 割地　英國に　九龍半島

第六章　露國の東方經略

露國の建設

- **欽察汗國滅亡**
  - 欽察汗國の衰微と共にモスクバ太公勢力を得て財政の權を握り終にイバン四世の時欽察汗國を滅して獨立せり。
- **コサック服屬**
  - 黑海岸に漂泊せるコサック部を懷柔し其酋長イエルマックは兵を率ゐてウラル山を踰え、シビル汗の地を取りて之を奉りしより東侵の端を發しシベリアの名起れり。

露清交渉

- **尼布楚條約**
  - 前出
- **滿洲經略**
  - 極東總督ムラビヨフは清國の長髮賊の亂に憾めるに乘じ黑龍江以北を占領し（愛琿條約）更に英佛聯合軍北清侵伐の際斡旋の報酬を求めて烏蘇里（ウスリ）以東を占領し浦鹽斯德を建てゝ極東經營の根據地となしたり。（一八六〇）

一　露國東方經略

- **伊犁條約**
  - 伊犁の回教徒等清國の疲弊に乘じて叛亂を起したれば露國は之を機とし伊犁を占領せり然るに清國は將軍左宗棠に命じて回教徒の亂を鎭定せしめ同時に露國に撤兵を要求せしかど露國應ぜず兩國將に開戰せんとせしが終に互に讓歩の結果コルゴス河を以て境とし清國より償金九百萬留を支辨して解決せり（一八八〇）
- **中央亞細亞經略**
  - 中央アジアにはヒバ、ブハラ、ホーカンドの三汗國鼎立して相爭ひければ露國はヒバ（一八七三）、ブハラ（一八八八）二汗國を降して保護國としホーカンドを滅せり。（一八七六）
- **英露交渉**
  - 露清交渉終局後露國は專ら南侵を計り遂にアフガニスタンに入りしかば英國はアフガニスタン王を助けて抗議しついで境界を議定して更にパミール境界につきて紛議生ぜしがこれまた無事に局を結べり。（一八九五）

第八章　佛國の印度支那經畧

佛越交渉

越南の興起

さきに既文惠安南を統一せしが舊王族の裔阮福映出で佛國宣教師ビニョーの勸めにより割地、通商の約し佛國の援を得阮文惠の後を滅して越南國を建てたり。

玩福映は前約を踐まず且佛國教師を虐待せしかば佛國は兵艦を派し柴棍を取り交趾支那の地と償金を得て和し更に東浦塞なその保護國となせり。

柴棍占領

佛越戰役

越南人は佛人を惡みて迫害を加へしかば佛國は基督教公布、紅河航通權を强取し更に保護を名として東京に駐兵せしかば越南は長髮賊の殘黨劉永福をひいて佛軍に抗せしかば佛國は國都順化府を陷れや

一　印度支那

清佛交渉

越南はもと清の封册を受けしかば清國は佛國に抗議し清國の和親こゝに破れ清の陸軍東京に入り佛の海軍は福建艦隊を滅し膨湖島を占領するに及び清國遂に屈して和を結び清國は佛國の東京占領を承認せり。

英佛交渉

佛暹交渉

佛國はかくて印度支那を勢力圏内に收むると共にメコン河東の地を强要せり。

英清協定

英國はかくては南方支那に於ける自國の利益を侵害せらるゝを以て抗議し兩國委員は境界を協定しメコン河上に幅五十英里の中立地帶を設定して局を結べり。

（がて保護國となせり。（一八八三）

第九章　朝鮮に於ける日清の關係

- 朝鮮
  - 大院君
    - 執政
      - 朝鮮は仁祖以　世々清の封册を受け毎年使を派して朝貢し我國へは將軍の代る毎に使聘を通じたるが王政復古と共に我より通商を求めたり。時に李熙位に在り幼少なるを以て實父大院君（李昰應）政を執りしが應ぜざりき。
    - 鎖國主義
      - 大院君外國を憎み基督教徒を迫害せしかば佛米二國軍艦を遣して其罪を問ひしも擊退せられたり。
  - 通商條約の締結
    - ついで我軍艦をも砲擊せしかば我國は嚴重にその罪を責め且通商條約（明治九年）を締結し釜山の外、仁川、元山の二港を開くことを許せしめ朝鮮の獨立國たることを明記せり。之より歐洲諸國も相次いで通商條約を結べり。然れども朝鮮は清國に對して尚外藩の禮を執れり。
    - 國王長じ大院君政を返して退隱せしが王妃閔氏の一族政權を壇にするを見て快からず漢城の兵を煽動して閔黨の

- 朝鮮
  - 壬午（明治一五）の變
    - 首領を殺さしめて自ら政權を握り且つ我公使館を襲はしめしかば我國は花房義質をして罪を問はしめしも未だ回答を得ざる間に清將馬建忠丁汝昌等は暴徒を鎭定し大院君を執へて清國に送りしかば朝議一變し償金を出し公使館に兵を置くことを約せり。
  - 甲申（明治一七）の變
    - 當時朝鮮は獨立事大の二黨に分れ事大黨は多く閔氏にして清國に賴りて國を保たんとし獨立黨は我國に賴りて獨立を全うせんとする朴泳孝金玉均の徒なり。明治十七年獨立黨事を擧げ事大黨の首領閔泳翊等を殺し援を我國に求めたり然るに清兵は事大黨を助け國王を挾みて獨立黨を破り我公使館をも燒けり。
  - 天津條約
    - 國に派し李鴻章と天津に會せしめ兩國の朝鮮駐在兵を撤去し將來出兵の必要ある時は行文知照すべきことを約せり。
    - よりて我國は井上馨を朝鮮に遣して償金を徵し又伊藤博文を清

- 原因
  - 東學黨の亂
    - 朝鮮の南部には東學黨とて西教を排して東學を振起せんことを目的とせる固陋の一團體あり。政府を怨めるものを集めて亂を作し勢頗る猖獗なり。
  - 清國の干渉
    - 然るに清國は天津條約に背きて大兵を送りしかば我國も亦兵を出して居留民を保護しかつ兩國力を併せて朝鮮の改善を圖らんにとを提議せしも聞かれず兩國の和こゝに破れなり。(二十七年七月)
- 開戰
  - 成歡牙山の戰
    - 大島混成旅團長は七月二十九日成歡牙山の清兵を驅逐しついで八月一日宣戰布告せられたり。
  - 第一軍進擊
    - 山縣有朋司令官となり平壤を取り鴨綠江を渡りて盛京省に入り九連城鳳凰城海城等を占領せり。
  - 黃海の海戰
    - 聯合艦隊司令長官伊東祐亨軍令部長樺山資紀等の率ゐる海軍は丁汝昌の率ゐる北洋水師と黃海に戰ひて大勝せり。

二 日清戰役

- 第二軍進擊
  - 大山巖司令官となり大連旅順を陷れ更に山東半島に上陸し海軍と力を併せて威海衛を陷れ北洋水師提督丁汝昌は軍艦兵器を納めて自殺せり。
- 講和
  - 下關條約
    - 要項
      - 一 朝鮮獨立の承認
      - 二 償金二億兩を出し遼東半島臺灣膨湖島を割讓す。
      - 三 沙市、重慶、蘇州、抗州、の四港開放。
    - わが海軍已に渤海を塞ぎ陸軍は南北より一舉して北京に進擊せんとす清國力盡きて和を請ふ。乃ち兩國の全權(李鴻章伊藤博文陸奥宗光)下關に會し講和條約こゝになれり。(四月十七日)
  - 三國干渉
    - 然るに露西亞は東方經略上我國の遼東半島領有を喜ばず。獨佛と聯合して異議を挾みければ我國は時局に鑑みてその勸告に從ひ遼東半島を還附し更に三千萬兩を受けたり。

第十章　清國に對する諸強の壓迫

一　列強の東方經略

- 露國
  - 日露協商
    - 下關條約の結果朝鮮は國内に獨立を布告し國號を韓と改め、爾來我國の扶護を受くるを見て露國異議を唱へたれば兩國交讓し日露協商を結びて韓國の獨立を確保せり。
  - 滿洲經營
    - 露國は日清戰役後直ちに東清鐵道敷設權を得更に旅順大連等の地を廿五ヶ年間租借し不凍港を得て多年の宿望を達せり。
- 佛國
  - 佛國も遼東還附の報酬として廣州灣の租借權（九十九年）及び雲南兩廣に於ける鑛山採掘權鐵道敷設權を獲たり。
- 獨國
  - 宣教師遭難を名として膠州灣を占領し、ついでその九十九年間の租借權及び山東省に於ける鑛山採掘權鐵道敷設權を獲得せり。（二十年）
- 英國
  - 露國との權衡上威海衛を二十五ヶ年間租借せり（仝年）

二　清國の疲弊

- 改革の機運
  - 米國
    - アメリカ合衆國は同年布哇を合併し更に米西戰爭の結果フイリピンを兼併し東洋經營の基地となせり。
  - 列強の壓迫は清人の覺醒を促し變法自强の氣運を生じたれば康有爲用ゐられて急激なる改革を斷行せんとせしが西太后を中心とする守舊派の爲に斥けられぬ。
- 義和團の亂
  - 勃發
    - 明治三十三年山東に義和團と云ふ暴徒起り、西教撲滅外人排斥を唱へ清廷亦之を保護する形跡ありてその勢益加はり遂に北京に入り清兵と共に列國公使館を包圍せり。
  - 鎮定
    - よりて日英米獨露佛伊の聯合軍北京を占領して公使館を救へり。時に皇帝西太后西安に蒙塵しけるが李鴻章慶親王をして和を請はしめ端郡王以下の元兇を所罰し償金四億五千萬兩を出して局を結べり。（三十四年）

第十一章　日露戰役

一　日露戰役

日英同盟

歐洲にては三國同盟露佛同盟の對峙せる間にひとり英國は光榮ある孤立を維持し來れるが露國の極東經營益その歩を進めその志測るべからざるものあり。こゝに於て我國と同盟を結びて東亞の平和を維持せんことを圖れり。（三十五年）

日露開戰

露國は義和團の亂に乘じ兵を出して滿洲を占領し一旦撤兵を宣言せしが期に至るも實行せず却りて併呑の歩を進め更に日露協商に背きて韓國の主權を侵害せり。

然れども我國は友誼の交渉によりて圓滿なる時局の解決を望みたるも露國は毫も其誠意なく陽に平和を裝ひ陰に軍備を整へて我を屈從せんとせり。よりて我國は東洋の平和と自國の安全との爲に遂に開戰するに至れり。（三十七年二月）

我軍連勝

東郷平八郎の率ゐたる我海軍は機先を制して露國の東洋艦隊を仁川旅順に襲撃して海上を安全にし乃木希典の率ゐたる陸

軍の一支隊は旅順の背面を攻撃して陷れたり（一月二日）本隊は大山巖指揮の下に兒玉源太郎善く謀りて遼陽沙河に捷ち更に奉天の大會戰に全く敵軍を擊破せり（三月十日）露國は更にバルチック艦隊を東航せしめしが東郷大將の率ゆる聯合艦隊は之を對馬水道に邀擊して全滅せしめたり五月廿七日

媾和成立

米國大統領ルーズベルトの勸めに從ひ我が全權小村壽太郎は露國全權ウィッテと米國ポウツマスに會して左の條項を議定しついで批准を交換せり。（十月）

媾和條件

一　露國は韓國に對する日本の宗主權を承認す。
二　北緯五十度以南の樺太を日本に割讓す。
三　遼東半島の租借權及長春以南の東清鐵道を日本に讓與す

第十二章　日露戰役後に於ける東亞の情勢

一　戰後の東亞

略說

日露戰役の結果は世界の政局に一轉機を與へたり。即ち東亞に日本なる一强國勃興し、露國をしてその傳統政策たる侵略主義の鋒を收めしめ延いて國際同盟關係に於ける均衡を失ひて三國同盟の跋扈を來せり。

日英同盟擴張

日本の國際間に於ける地位の向上は英國をして深く日本を信賴せしめ兩國は遂に同盟の範圍を印度にまで擴張し更に一層鞏固なる攻守同盟を締結して東洋の平和を保證するに至れり。(三十八年八月)

日佛日露協約

我國は東亞に領土を有する歐洲列强との國交親善を期し先づ佛國と日佛相互及び清國の領土を保全せんが爲に日佛協約を結びついで露國とも同じ目的の日露協約を結べり。(四十年七月)

米國は先に布哇を併せフイリピン群島を占領して太平洋

日米覺書交換

上及び清國に對する關係一層深厚を加へたれは我國は更に米國と覺書を交換して相互及び清國の領土保全並に清國に於ける商工業の機會均等を約せり。

日本韓國併合

日露戰役後我國は韓國と日韓協約を結び統監を京城に駐在せしめてその施政の改善を圖らしめ更に兩國民の幸福を增進し東亞の平和を永遠に保持せんが爲に韓國併合の必要を認め遂にその統治權を繼承し韓國を改めて朝鮮となし朝鮮總督を置きて政を行はしめたり(四十三年八月)

清國の覺醒

清國は我國の進歩發展に鑑み、さきに立憲豫備の上諭を下しついで十年の後に國會を開設すべき旨を約せしが間もなく、德宗、西太后ともに歿し宣統帝僅に三歲にして即位しその父醇親王政を攝し、國民の輿論を酌みて國會開設の期を早め新に內閣官制を定めて政務を行はしめたり

第十三章　清朝の滅亡、中華民國

一　清朝の滅亡

革命黨

勃興

漢人中には夙に清朝を倒して滿人の羈絆を脱し以て漢人の天下となさんと企つる所謂革命黨と稱せらるゝものあり。清朝の内外に於ける勢威の失墜と共に漸く勢力を增大せり。

擧兵

曾々鐵道國有を斷行して人心の動搖せるに乘じ湖北の軍隊と結びて兵を武昌に擧げしかば中清南清の諸省相次いで之に應じ假共和政府を南京に建て孫文を推して假大總統となしたり

袁世凱の起用

革命軍一度起るや、騷亂忽ち四方に傳播せしかば清廷大に愕き先に野に下れる袁世凱を起して總理大臣となし醇親王の攝政をも止め全權を委任して叛亂の鎭定に當らしめたり。

宣統帝の退位

然るに革命軍の勢益盛なりしかば清朝は袁世凱の勸告に從ひ四圍の形勢に鑑みて遂に退位の詔を發し皇帝の尊稱と年金とを得てその主權を放棄し清朝は二百六十八年にして滅べり時にわが明治四十五年二月なり。

二　中華民國

成立

清帝退位の後袁世凱は大兵を擁して北京に在りしが南北妥協の結果推されて中華民國の假大總統となり借欵を起して財政を補ひ舊革命黨の領袖孫文黃興等を國外に放逐して政府の基礎を固め國會を改造して約法を定め終に正式大總統に選ばれ列國の承認を得たり。

日獨交戰

歐洲に於ける三國同盟の跋扈は英國をして露佛兩國と協商せしめ以て僅に勢力の均衡を保ちしが會々墺塞關係の破裂より延いて世界の大亂となれり。我國は日英同盟の條規によりて獨逸と開戰し遂に膠州灣を陷れついで獨逸の勢力を東洋の海上より驅逐せり。

袁の失敗

袁世凱漸く實權を掌握するや帝位を窺みこゝに帝政運動起れり。我國は支那の情勢に顧み英露佛伊四國と共に實施延期を勸告せしがやがて叛亂雲貴に起り南方諸省これに應じ勢漸く强大なり。世凱兵を遣りて之を討たしめしがこの叛亂中に袁氏忽然として病歿せり。

共和確立

黎元洪つぎて大總統となり袁世凱の擅に定めし約法を恢復して反對派を融和し共和主義の確立を計れり。

問題

一 清朝の興起（海兵）
一 吳三桂（東高商）（高師）
一 三藩の亂（高師）
一 聖祖高宗時代（高師）
一 聖祖の事業（高師）
一 尼布楚條約（士官）（外語）
一 露國東方經略の由來（機關）海兵）
一 露支境界劃定の條約（高等）（專檢）
一 英臥兒帝國（專檢）（外語）
一 アクバル（高師）
一 アジアに於ける英國の經營（海兵）
一 英國印度建設始末（東高商）
一 印度に於ける英佛の爭奪（士官）
一 ヘースチングス——（長崎商）
一 十九世紀英清關係（海兵）
一 阿片戰役及南京條約 海經理）（高等）
一 阿片戰役（士官）（海兵）（東北農）（商船）（高師）
一 阿片戰役の結果（外語）
一 南京條約（專檢）
一 香港（長崎商）（高等）（海兵）
一 林則徐（高等）（高師）（山口商）
一 長髮賊（商船）（海兵）（高師）（海經）（機關）
一 洪秀全（長崎商）（機關）
一 天津條約（海兵）
一 曾國藩（機關）（山口商）（長崎商）

一 戈登（東北農）（東高商）（高師）
一 愛琿條約（高等）
一 ムラビヨフ（山口商）（高師）
一 浦鹽斯德（長崎商）
一 伊犁事件（高師）（士官）
一 伊犁方面に於ける清露關係（七高）
一 アジアに於ける英露衝突及交渉につきて記述せよ但各事件を年代順に記せよ（士官）
一 安南に於ける清佛の衝突（海兵）
一 清佛戰爭（士官）
一 清代に於ける著しき事件五つ（海兵）
一 湯若望（高師）
一 韓半島に於ける日露清の關係（海兵）
一 大院君李昰應（高師）（士官）
一 甲申の變（三高）
一 天津條約（機關）
一 東學黨（專檢）
一 丁汝昌（山口商）
一 平壤（海兵）（高等）
一 下關條約（海兵）
一 三國干涉（長崎商）
一 李鴻章（山口商）
一 北清事變（義和團）（士官）（高師）（高等）
一 日清戰後の露國の極東經營（高師）
一 清國と外國との交戰を列擧せよ（機關）
一 清國の領土割讓又租借地名（士官）

一 軍機處（高師）
一 顧炎武（高師）
一 ヘザン（專檢）
一 清の開國以來東洋に起れる重大事件を年代順に排列せよ（東高商）
一 秦、隋、晉、漢、三國、宋、五代唐、南北朝、明元清を時代順に列記せよ（山高商）
一 夏以後近世迄漢士に興亡せし國名繼承順（士官）

東洋史 終

大正五年十月三十日印刷
大正五年十一月[illegible]日發行
（東洋史奥附）

編纂者 東京市日本橋區住吉町二十二番地 中等教育研究所
發行者 東京市小石川區雜司ヶ谷町五十六番地 谷澤光吉
印刷者 東京市日本橋區住吉町二十二番地 高嶺繁太郎
發行所 光世館
電話浪花一二八九番
振替口座東京一九七九五番

定價金二十八錢

不許複製

終